

---

# ユダメシキ！

川原白水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユダメシキ！

### 【Nコード】

N2492W

### 【作者名】

川原白水

### 【あらすじ】

普通の男子高校生、弼ゆだめの家に突然現れた謎の美少女、織しき。とある出来事のせいで自分の感情を整理できなくなった弼。織は遠慮の無い言葉と態度でそんな彼の生活を変えていく。やがて真理をついた喝を繰り返す織に、弼は弱気な心を突き動かされ。一方、彼女は他にも目的を持っている様子。それはいったい何なのか。彼女の過去は一体……。ツンな織とフツな弼の、成長する学園物語。

## プロローグ その1

ゆさゆさ。

ゆさゆさゆさ。

体を揺すられて目を覚ます。

少女が、暗い部屋の中、ベッドの端に顎を置き、少年の体を揺すっている。

「な……に」

「その……。入れて……くれぬか」

少年の顔前には、じっと見つめる、こぼれおちそうなほど大きな目。

普段より、潤んだ瞳。

おねだりは、いつも、か細い声。

「またかよ……」

「そう、申すでない……」

「ここのところ、毎晩だよ？」

「わかっておる！ ……おなごに恥をかかせるでないっ」

黒髪の美少女は、顔を赤らめながら少年を睨む。しかしすぐに恥ずかしさで満ち、

「わかっておるのじゃ……。はじめてなのじゃ、こん……な……」

と、続けた言葉を口の中で溶かしてしまった。それほどまでに、彼女の羞恥心は臨界点に達していた。

少年は軽いため息をついて、彼女の横で呆れ顔を作る。しかし心の中では小さな優越感が自然と頭をもたげていた。彼女がこんなにも求めてくるのは、このとき“だけ”なのだから。

ゆっくりと腕を伸ばすと、彼女はぎゅっと体を固くした。少年の伸ばした指先が、ほのかに赤い突起に触れる。彼女は体を小さく震わせると、少し恥ずかしそうに視線を逸らした。部屋に、静かに響

く、微細動する音。

少女は、頬を上気させて見つめてくる。

その恨めしそうな眉目に向かって、少年は冷静に諭す。

「少し待って」

「わっ……わかっておる」

彼女の胸の高鳴りが聞こえてきそうなくらい静かな部屋。そこに立つ音は、微細動する音と、彼女の荒い呼吸、そして衣擦れの音。少女は、はやる気持ちを抑えられないのか、腰を左右に揺り動かす。そのせいで、カサカサと行儀の悪い音が部屋に響いた。いつもは気高い彼女が、このときだけは理性より本能を優先させている。耳元で「はしたない」と囁いてやろうか。そんな嗜虐的な戯れを想起するほど、普段の彼女からは想像できないくらいに、身も、心も、乱れている。

あっ、もうすぐ……。

悦びに濡れた唇は、咲きかける蕾のように小さく開いた。  
喉の奥からこぼれる声。

「あっ……く……る……」

ジャジャジャー……ン!!

壮大な交響曲が部屋を満たした。

「きたああああっ!!」

織<sup>しき</sup>は喜びで叫び、粥<sup>ゆだめ</sup>は怒りで叫んだ。

「いいかげんにゲームの電源の入れ方くらい覚えてくれよっ! こ

こを押すだけだろう！ こ・こ・を・押・す・だ・け・！・！

弼は眠気と闘いながら抗議するが、織は興奮してしまつてまるで聞いていない。

「ほっ、褒めてつかわずぞ、弼」

「まったく。お前がゲームをやるたびに起こされる身にもなれよ！」  
六畳の狭い部屋に不釣り合いな32インチのテレビ画面には、新作RPGのタイトル画面が映し出されている。

「それで、と。ここから、どうするんじやつたかの」

「それも教えただろ。スタートボタンを押して」

「すたあとぼたん、は、この四角じやつたか、三角じやつたか」

「三角！」

弼は織からコントローラを奪うと、セーブファイルを選択するところまで操作してやつてから突き返した。ニコニコしながら「すまぬの」と、それを受け取る織。

ちくしょうつ、このときだけカワイイのは反則だろ……。

弼はげんなりする。満面の笑みでゲームに向かう織は、普段の彼女ではない。

テレビにピンジャックを差し込み、ヘッドフォンで彼女の両耳をふさぐ。夜通し大音量で遊ぶ織と、そのせいで安眠を妨害された弼が、大ゲンカした結果に編み出した善後策だ。

織がゲームに没頭しだしたのを見届けると、弼はベッドに横たわった。暗い部屋にテレビ画面がチカチカと明滅する。その光を避けるように、薄いタオルケットを頭からかぶると、理不尽な何かから身を守るように身を丸めた。

おかしい。何かがおかしい。

健全な高校生男子としては、まるでラノベのように美しい展開だ。なにしろ家で寝ていたら、目の前に美少女がいて、その娘が自

分の部屋で寝起きを共にするようになったのだから。ここからハーレムでセクシャルでウハウハな生活が展開することを妄想したとしても、誰が弼のことを責められよう。

難を言えば口と態度の悪さだが、多少のツンなら弼にも耐性はある。そこからデレるお約束なら、初期のツンなどいくらでも我慢しようではないか。

それなのに……。

タオルケットに埋もれながら、ここ数日、毎日思い続けている言葉を愚痴のように吐く。

「早く、帰ってくれないかな……」

理想とは、脳内で完結する快感だからこそ、理想というのだ。

## プロローグ その2

「又シの願いを聞き届けてやった」

彌が織と初めて会ったのは、自分の部屋だった。悩み多き一六歳の少年が深い眠りから目覚めたとき、織は彼の枕元に立っていた。第一声はもちろん織のもの。そのときの彌の返答は、以下のとおり。

「はふあ、へ……はの……あはは」

完全に寝ぼけていた。

「又シの願いを聞き届けてやったと申しておる！」

織は容赦なく同じ台詞を不機嫌に叩きつける。そのおかげか、彌はようやく夢かまことを疑うところまで脳を起こした。とはいえ先ほどと同じように、

「はあ……え？」

と返事をするのが精一杯だったのは誰にも責められまい。

想像してみてほしい。眠りから覚めたとき、自分の部屋の枕元に誰かが仁王立ちしている。しかもそれはどうやら、古めかしい奇妙な和服を着た、黒髪の美少女のようだ。そして圧倒的な上から目線でいきなり怒鳴られている。

この戦術の天才を思わせる三段攻撃の手腕。武田信玄でも混乱するなというのは酷な話だ。

「どなたですか？」

彌はしごく正当な質問をした。しかし、正当な行為が必ずしも正当な結果につながらないのと同様、彼の質問は彼の望む答えを与えてはくれなかった。

「起きやれ！ ボケウド！」

返ってきたのは聞いたことのない罵声だった。結局彼女は自らを

「織」と名乗ったが、どこの誰で、なぜここにいいのかといった、基本的な説明責任が果たされることは無かった。そして彼女は、当然のごとく弼の部屋に居座るつもりの方だった。

数日後、弼は考えた。

これはもしや、ラノベにありがちな展開を利用した、新手の詐欺か。オレオレ詐欺ならぬ、ラノベ詐欺とか。

まてよ。もしそうだとしたら、裁判の時に有利になるのは記録だと誰かが言っていたな。よし、こういうことは早く手をつけたほうがいい。彼女から受けた仕打ちを、箇条書きにまとめておこう。

以下は、弼の渾身の被害レポートである。

- ・寝起きに、しかも初対面に、いきなり人生について説教される。
- ・突然機嫌が悪くなり、食事と飲み物を買ってこいとパシられる。しかも自費。
- ・帰りが遅いだの食事の選択に興がないだのと舌の貧しさを説教される。

- ・テレビとゲームに興味を持たれる。
- ・テレビとゲームについての原理的な説明をさせられる。
- ・説明が下手だの語彙が足りないだのと国語力の低さを説教される。
- ・新作のゲームを持ち主より先にプレイされる。
- ・織、ゲームにハマる。プレイは三日三晩続く。
- ・出て行くように低姿勢でお願いすると、恩と義理についてくどくどと説教される。

- ・毎朝毎晩ゲームで遊ぶ上にわからないことがあると就寝中もおかまいなしに質問される。

- ・織が寝ているのを見たことが無い。
- ・弼だけが重度の寝不足になる。

というわけで、今に至る。



……なんだこりゃ。

弼は自分で書いたメモを見て啞然とした。ただのケンカじゃないか。この箇条書きを裁判官が証拠として採用したとしよう。検察はあまりのレベルの低さに青ざめ、織の弁護士は勝利を確信して小さくガッツポーズをするだろう。金銭的な被害も、パシラされた数百円が最高額で、その後は自分の夕飯を分け与えている。

勝てない。この裁判は決して勝てない。

「誰か、なんとかしてくれないかなあ……」

弼は他人任せなつぶやきを吐いた。当然、それで事態が好転するはずもなく、すでに数日が経過している。あの日以来、弼は何度もこれまでの出来事を思い返してはため息をついていた。

そして、とある出来事の回想で、必ず身体が固まる。

記憶とは、悲喜こもごもを無造作に詰め込んだ引き出しのようなもの。だが中身のほとんどは、ため息をつきたくなる類のものばかりなのだ。

## 第一話（1） 心の穴（前書き）

普通の男子高校生、弼ゆだめの家に突然現れた謎の美少女、織しき。とある出来事のせいで自分の感情を整理できなくなった弼。織は遠慮の無い言葉と態度でそんな彼の生活を変えていく。やがて真理をついた喝を繰り返す織に、弼は弱気な心を突き動かされ。一方、彼女は他にも目的を持っている様子。それはいったい何なのか。彼女の過去は一体……。ツンな織とフツンな弼の、成長する学園物語。

## 第一話（１） 心の穴

### 第一話（１） 心の穴

大げさではなく、弼<sup>ゆだめ</sup>の人生を変えた事件があった。

あれは、ちょうど三週間ほど前の高校からの帰り道のことだ。

弼は二駅離れた共学の私立高校に自転車通っている。この地域ではトップクラスの成績をおさめる進学校だが、弼は其中で可もなく不可もない成績に甘んじている。

その日もアスファルトの照り返しでうだるような暑さの中、自転車であらだと住宅街の坂道を登っていた。帰宅部の下校時間はまだ陽も高く、日差しは目にも肌にも痛い。部屋でクーラーの風に身をゆだねる快感を想像しながら、とにかく自転車のペダルを憎々しげに踏み続けていた。

坂の途中にはこの春に更地になったばかりの空き地がある。

弼は、ここを通りかかるたびに、今でも後ろめたさを感じる。

管理者がずさんなのか、長らく空き地だったせいで誰も遠慮しないのか、そこには誰のものとも知れぬ古くなった自転車が何台も捨てられていた。たかだか数百円の粗大ごみ料金をケチり、廃棄物を放置する輩というのは、どこにでもいるものだ。

弼は一度、そこから自転車を盗んだことがある。自分の自転車のタイヤが帰宅途中にパンクし、徒歩で押して帰らざるをえなかったときだ。出来心で自分の自転車を空き地に放置し、見知らぬ自転車に乗り換えて家に帰った。

こういうとき、男は得てして小さな手柄を立てたような、屈折した快感に浸るものだ。ご多分に洩れず弼もそのタイプの男であった。不法に捨てられた自転車をリサイクルしてやってるんだ。僕は褒められることをしているのさ……。自らの不法投棄は遠くの棚に放り

投げて、過去に誰かが乗っていた自転車のペダルを漕ぐ。

しかし、帰宅してきた父親と家の玄関の前で鉢合わせしたとき、粥はみつともないくらいに動揺した。その動揺と見知らぬ自転車を交互に見た父親は、不肖の息子に対して実に明快な態度をとった。静かに、しかし断固とした口調で「家に入るな」と告げ、これみよがしに扉に鍵をかけたのだ。そのガチャリという音が、粥の胸の中で何倍にも大きくなって反響する。

体格は中肉中背、普段から温和で高圧的なところの全くない人である。その父親に関係を拒絶するような態度をとられたことは、反抗期を終えたばかりの粥にとって、ショックだった。

自分でも罪には気づいていた。だからこそ粥は、自転車を元あつた空き地に戻しに行くことにした。とはいえ、誰かのせいにしなければ行動に移せないあたり、まだまだ精神の幼い粥である。

「ム力つく……」

この場合の文句の矛先は、当然父親だ。とはいえ文句を言いながらも、盗んだ自転車には乗らずに徒歩で押していく。それが粥のせめてもの矜持だった。

一時間後にパンクした自転車を引いて家に帰る。恐る恐る扉に手をかけると……玄関の鍵は開いていた。扉を開いた粥が最初に目にしたのは、玄関に腰を下ろした父親の姿だった。どうみても磨く必要の無いピカピカの靴に、べつとりとクリームを塗りながらにこやかに手を動かしている。そして「おかえり」と笑顔で言った。

粥は、何よりも自分がみじめな人間に思えて、ただいまの一言すら言わずに二階への階段を駆け上った。

それからというもの、毎日この坂を通るたびに、ホロ苦い思いをする粥である。

粥の乗る自転車がちょうどその空き地にさしかかったとき、尻ポ

ケットの携帯電話がブブブブ、と震えた。粥は坂の途中で自転車を止めて苛立ち混じりに取り出す。ウィンドウを見ると、苛立ちは疑問に変わった。そこには市外局番を含めた見慣れない番号が表示されていたのだ。

「もしもし」

「ああ、もしもし。明里<sup>あかり</sup> 粥<sup>ゆだめ</sup>くんの携帯ですか？」

「はい、そうです」

携帯に出た相手は、遠慮がちな、しかし芯の太そうな大人の男性の声だった。

「私は、明里くん、つまり君のお父さんの会社の者だけど……突然電話してしまって申し訳ない」

粥は、じわりと押し寄せる悪い直感に全身が構えるのを感じた。

「実は、ちょっと話があるんだが、落ち着いて聞いてくれるかな」  
まさか……。直感は、不吉な確信へと変化していく。

「大変言いにくいんだが……」

「父に、何かあったんですね」

その質問は、ほとんど確認だった。

「う、む。君のお父さんがね、仕事中の事故で亡くなった」  
やはりそうか。

真っ先に頭が納得した。

次いで心が震えるか、と思ったが、なぜか、いつまで待っても静かだった。粥は自分の心が動かないことに、おや？ と首をかしげた。

「大丈夫かい」

「あ、すみません。大丈夫です。あの、母には」

「ああ、先ほどお伝えしたよ。当然のことなんだが、少々感情的になられてね。お話ができなくなってしまったんだ」

この人は、声の向こうで困惑した表情を浮かべているに違いない。悪い人ではなさそうだ。

「ご迷惑をおかけしました」

「いや……。それで、言いづらいたが、お母さんと一緒にご遺体の確認に来てほしい。西鳥居総合病院だが、場所はわかるかな」

「調べて伺います。あと、あなたは」

「私の名は、埜多家。埜多家のだけ 泰蔵たいぞうだ」

知った名だ。この地域では有名人と言っている。

「わざわざ、ありがとうございます。家に帰り次第、母と向かいま  
す」

「ああ、病院で待っているので案内しよう。…… 弼くん、君は強い男だな」

やけに感心した声だった。母のように取り乱さなかったことへの感謝か、それとも部下である父を死なせた罪悪感の裏返しなのか。どちらでもよかった弼は、再びお礼を言って電話を切った。

その後の段取りは埜多家氏のおかげでスムーズだった。あつというまに通夜から葬式、火葬場、埋葬場所まで手配が終わる。弼と彼の母親は、病院の廊下のベンチでただ座っていればよかった。

その頃からだろうか。弼は胸のあたりにこもった不快さを覚え、何かが欠落してしまったような違和感にうつすらと気づきだしていた。

弼のその悩みは、通夜の席に座ったとき、深刻な域に達していたことが判明する。

おかしい。まったく涙が出ない。

悲しさも、寂しさも、どこかに置き忘れてきたみたいだ……。

父親の遺体と対面したときも、遺品の整理を手伝ったときも、こみ上げてくるものがなかった。母親といえば、あれ、母さんって父さんのこと、そんなに好きだったわけ？ と聞きたくなるほど何度も泣き崩れている。

それなのに自分ときたら。いくら実感がわかなくても、限度というものがある。

周囲が悲しみに沈む通夜の席で、自分だけが泣けないというのも、意外と面倒なものだ。能面のように無表情でいれば、無頼を決め込んだように勘違いされ、不遜ととられかねない。少し窮屈だが、粥はとにかくうなだれてやり過ごすことにした。

同じ高校の制服姿が焼香に訪れると、意味もなく気恥ずかしさを感じる余裕すらあった。そのときも顔を上げることとはせず、同じ型のローファーが歩み行くのを眺め続けることで気を紛らわせた。へえ、靴の履き方ひとつで、ずいぶん性格が出るものだな、と妙なところで感心する。

葬式も終わってあつというまに数日が過ぎる。

粥はその日だけでなく、翌日の葬式も、その後も、まるで他人事のように、涙が出なかった。

一階の台所の食卓では、連日、母親が萎える心を奮い立たせながら雑事をこなしていた。葬式と香典の収支と礼状書き、喪中はがきのリストづくり、遺産相続の手続き、そして、就職活動。

心から嘆き悲しんでいる母親が生活というリアルと闘っているのに、自分は父親の死とリアルに向き合えていない。その後ろめたさから、せめてリストづくりくらいは、と勇気を出して手伝いを申し出た。しかし母親は、

「なにかしていないと、辛いのに」

と笑顔を作ろうとして失敗し、唇をかねて声を震わせた。

粥は、初めて見る“憔悴した親”という生き物が怖くなり、それから二度と手伝いを申し出なかった。

あれから三週間は経ったが、粥はずっと、心に大きな穴が空いているみたいに、ぼっかりとしている。涙はその穴からこぼれおちていて、涙腺まであふれ出てこないのではないか。粥はそう考えることで、無理にでも自分を納得させることにした。

「なんなんだよ、いつたい……」

ため息交じりにつぶやきながら、タオルケットをはねのけて仰向けに大の字になる。織が遊ぶゲーム画面のせいで明度が頻繁に変わる部屋に、父親が死ぬ前と何も変わらない月光が差し込む。

そういえば、葬式が終わってからこのかた、二階の自分の部屋から出ていない。夏休み中であることも手伝って一日のほぼすべてをここで過ごしている。何をしていたのかよく思い出せないが、一度読んだマンガを機械のように繰り返し読むことで時間を消化していた気がする。

一週間ほど前、楽しみにしていたゲームが宅配便で届いた。パツケージの封を切ることまではしたのだが、その後まったく気のりがせず、ゲーム機本体の横に立てかけたままにしていた。それを持ち主より先にプレイしているのが、そう、飛鳥時代のような和服を着た、言葉遣いのおかしな彼女だ。

ちらつと様子を見ると、床にぺったりと座りながら、脇を全開に広げて、キャラクターを移動させるたびに全身を傾けつつ、嬉々としてコントローラを操っている。ときおり、はっ、だの、ほっ、だのという掛け声のあとに、ああっつ、という落胆の声が聞こえてくる。まだあの細い橋を渡ることができなくて、川向うの街にすら行けてないんだな。弼は何とは無しに彼女の後姿を眺めた。

初めて会ったときは、頭の上にハートマークが乗ったような、あまり見たことの無い髪型をしていた。だが、とある事件をきっかけに髪型は今のものになった。たとえばいかにも流れるように合意が得られたように聞こえるが、実際には“些細な”交渉があったのである。

「なぜじゃ！　なぜ予が結いを変えねばならぬ！」

「このヘッドフォンは密閉型って言って、けっこう重いの！　頭にちゃんと渡さないと、お前みたいに長時間プレイするヤツはものすごく疲れるの！」

「それくらい我慢すると申しておろっ！」

「ほっ」



「なっ、なんじゃ、なぜニヤける」

「昨日、お前は偉そうにこう言ったよな。『こうしてアゴに渡せばよからう。人たるもの、予のように機転を利かせねばならぬぞ』」

「……それはもしか、予の口マネか」

「それがどうだ。案の定途中でお疲れになったご様子で」

「……ぬっ」

「我慢しきれずにピンジャックを引っこ抜いただろう！ 真夜中に爆音が鳴り響いて、さすがに母さんが部屋をのぞきにきたじゃないか！」

「すぐに隠れて事なきを得たではないか！ まったく男の子おのこのクセに終わったことをグジグジと。まるで爽やかさが足りぬ！ まるで健やかさが足りぬ！ 部屋でゴロゴロと食つか寝るかの毎日を過ごし、あげくの果てに予に八つ当たりとは！ あーあー情けない！ ヌシはモテぬじやろう！ なあ、そうじやろう！」

勢いよくまくしたてるが、これっぽっちも反論になっていない。これはもう、子どもの負けず嫌いだ。当然、弼が納得するわけもない。

「僕のパーソナリティについて文句があるなら後日たあっぷり聞く！ しかし今は別だ。前科のあるヤツが何を言っても無駄！ 髪型を変えないならゲームを売り飛ばす！」

「んぬっ……ぐっ……ゲームを盾に予を脅すかつ！」

「それくらいしないと、言うことを聞かないだろうっ！」

「今までどおり、予の言いなりでおればよいではないかつ！」

「なぜ僕がこんなにも反抗するんだと思う！ お前のいいなりになった結果、血尿が出るくらいフラフラだからだよッ！」

実際、弼は三日三晩続いた織のゲーム祭りのせいで、体力的に限界にきていた。

織は顔を真っ赤にして、弼をいつも脅していた凶悪な目つきでにらみつけてくる。いつもなら争いごとを避けてすぐに諦める弼も、しかし今回は引き下らない。僕の安眠のため！ いつまで

もこいつの言いなりになってたまるものか！

しばらく睨み合いは続いたが、弼がまったく引き下がらないことに気づいたのか、織は突然諦めたように横を向いて吐き捨てるように言った。

「わかった！ わかったわい！ まったく……おなごを恐喝するのは、又シも見下げ果てた男の子よの」

彼女はすくつと立ち上がった。小柄だが、例の妙な和服を着ているせいで体型はいまいちわからず、年齢は不詳だ。少し幼く見える丸顔だが、目は大きく鋭く、口元はきゅつと結ばれ、とにかく気の強さを感じさせる。あごを引き、斜めに弼を見おろす立ち姿は、小柄な仁王像を彷彿とさせる。弼が織を心の中で“プチ仁王”と呼んでいるゆえんである。

織は、頭頂部に結っていた髪の毛の紐を緩め、無造作にかかるく頭をひとふりした。

まるで、そこだけ重力が緩んだかのように、豊かな黒髪がスローモーションでふわりと舞った。

えっ！ ……待て。今、目の前に立っているのは……。

弼は彼女の立ち姿に、陶然と、口をだらしく開けたまま、頬を染めて見蕩れた。

見蕩れていることに気づいても、なお見蕩れてしまうほど、それは抗いがたい感情だった。

目線を、動かせない。なんだこの吸引力は。

不覚っ……！ ちくしょう！ かわいいじゃないかッ……！

繊細で、艶ある黒。波打つ漆黒の豊かな髪が、まるでマントのように肩にふわりとしなだれかかる。首から腰にかけて身体にまとわりつく様は、胸に黒猫を抱いているかのように思わせるしなやかさ。数本が濡れた唇に付くと、鋭い目つきと相まって、幼顔に似合わぬ色気を醸し出す。

む、無念。

初めて女性にこうも見蕩れた弼にとって、それは、全身が粟立ち、胸がざわつくほど、新鮮な経験だった。少女だと思っていた相手は実は女だったことに気づかされたような、そんな甘酸っぱい衝撃。弼は彼女の中の何かに狼狽したのだ。

一方の織は、何が恥ずかしいのか、明らかに照れていた。

「ほ、ほれ、要望どおりほどいたぞ」

「……」

「弼っ！」

「えっ……あ、ああ。じゃあ、ヘッドフォンを……」

意識を奮い立たせて、ヘッドフォンを手に近寄る弼。しかし彼女は突然、汚いものを見るような眼差しをして、突然胸の前を両手で押さえ隠しながら避けるように後ずさった。

「なんだよ。急に」

「又シ、目が妙にイヤらしい……寄るな。気色悪い」

気色……悪い、だと？

はっ……ははっ……。グッバイ、短いときあいだったな、“陶然”。

よお、おかえり。帰ってたのか、“激怒”。

弼は心で擬人化したふたつの感情に、別れと再会の挨拶をした。

出戻りの感情が、弼に親指を立ててゴーサインを出す。『さあいこ  
うぜ、兄弟！』

「イヤらしいってなんだよッ！ 失礼なヤツめッ！」

「さては、予があまりにも美しくて見とれおったろう！ 汚らわしい！ 身の危険を感じる！ もうよい、予がやるからよこしやれ！」

倍返し勢いに、弼の激怒クンが尻尾を巻いて逃げ出した。しかも半分は凶星だったため、言い返すまでに半拍の間が空く。これでは織の罵声を認めてしまったも同然だ。

「か、勝手にしろ」

むくれてヘッドフォンを差し出す弼。

手荒く受け取った彼女は、弼に背を向けてヘッドフォンをもぞもぞと頭にかぶろうとする。が、長い髪が邪魔をするようで、うまく被れず、悪戦苦闘している。

「な、んじゃ、いたいっ！ 髪が挟まる……うぬっ、ぬぬぬっつ！」  
手伝ってやるものか、と完全に無視を決め込むつもりだった弼だが、片目で様子を観察していると、ヘッドフォンと格闘する織の姿が少し滑稽に思えてきた。

「髪、結べばいいじゃないか」

ボソツと言ったつもりの言葉は、思った以上に織を刺激したようだ。彼女はキツと眼光鋭く全身で振り返り、体を前に傾ける勢いで怒鳴った。

「又シがほどけと言ったのであるオオツ！！」

「やつ、そうじゃなくてさ」

弼は、今まで恐怖しか感じることもなかった、真っ赤になつて怒る彼女の顔が、実はそこまで怖くないことに気づいた。口調からは卑屈さが抜け、自然に話せるようになったようだ。

「こういう風に結べば、髪が落ちてこなくていいんじゃないか？」  
雑誌のグラビアページを開き、水着姿でにっこりほほ笑むポニーテールのアイドルを指さす。チラリと水着写真を見た彼女は、勢いよく後ずさつて慌てふためいた。

「ぬなあっ！？ ち、乳がつ、あ、脚がつ、はみ……はみ出て……」

「…この無礼者ッ！」

反応を予測はしていたものの、ちょっと面倒な気分になる。

「あのさ……」

「おなごの肌もあらわな姿を見せて、どうせいというのじゃッ！」  
「……どうもこうもねえよ。髪型って言ってるだろ」

照れもせず突き付ける弼。仕方なしに近寄ってくる織。

「又シらの常識はどうなってる！ 現世の男の子もおなごも、恥辱も、劣情も、脚も、ち、乳も、こうも隠さぬほど心が歪んでおるのか……」

弼から雑誌をひったくるように奪い取ると、眉根に嫌悪感を表したまま、じつくりとページを見始めた。

「くっ……見るもケガラワシイ絵よ。だいたいなんじゃ、この面積の狭い衣は……。女ともあろう……ものが……」

その変化は突然訪れた。

織の表情が徐々に消えるとともに、声はとぎれとぎれに小さくなり、あれほど嫌がっていたカラーページで腰をくねらせるアイドルを凝視しはじめたのだ。

「なっ、こっやって後ろでひとつに束ねていれば、ヘッドフォンもしやすいだろ」

弼が話しかけても黙って雑誌を握りしめている。

「おい、織。何か言えよ」

うつむき気味の織を下から覗き込むと……。

えっ……！？ 弼は、心臓が一瞬、跳ねるのを感じた。

「……っ」

あの織が、声を押し殺して、雑誌を凝視したまま、目に涙をためている。

「……うっ」

嘘だろ……。だって、部屋に突然現れて、理由も必然性も説明しないまま、まるでタチの悪いヒモのように数日間棲みつき続けているんだぜ。面の皮の厚さは大要塞の鉄門扉にも負けないと思っただのに……。泣いてる……？ あの織が……本当に？

驚くのと同時に、疑問が湧きあがる。

なぜ？ どうして？ 僕は何か、まずいことを言ってしまったのだろうか。

織よ、こうして結うとよい。

なんじゃ、結びづらい結いじゃの。

そなたはいつも文句ばかりだの。よいから早う結え。……お  
お、そうじゃ。その姿じゃ。

……吉よ……おかしゅうは、ないか？

なんの。怒ると鬼の形相のそなたが、天女に見えるわ！

吉！ 言い過ぎじゃ……。

はははっ、鬼の織でも照れるか！ これは趣深い！

ば、バカモノ……。

頭の中で、さわやかで優しくそんな少年が、織の名を愛しげに呼ぶ。追憶にたゆたう、嬉しくも恥ずかしい二人だけの時間。色鮮やかな幸福の景色は、くつきりと思い出せる分、余計に織の心を無惨に切り裂く。

「き……ち………吉……よお………」

織は震えた声で誰かの名を呼んでいる。

そのか細く消え入りそうなつぶやきは、弼の心に迫るものがあつた。彼には想像もできないくらいの悲しみを、この小さな体で、必死に抱えているのだろうか。

だが反面で、弼は少しうらやましくもあつた。

こいつは、何かをこんなにも嘆いている。

でも……僕は……。

自分の「泣く」という感情の欠落に改めて失意を感じた弼は、小さく震える織をただ見つめるしかできなかった。心の冷めたい男が、熱い涙を流す彼女に、何かをしてやる権利など無いのではないか。そう思った弼は、小さく「ごめん……」とつぶやくしかできなかったのだ。

弼の言葉が聞こえたのか、織はハッと我に還る。両手の袖で必要以上に目を拭くと、取り繕うように明るく振る舞いだした。

「う……む。この髪型は、なかなかじゃの！ 確かに首まわりも涼しげじゃ」

目元も赤いまま、無理に笑顔を作った織は、さっそく髪を手で束ねて、後ろで結ぼうと試みる。弼は、いたたまれない気持ちでその

姿を見ていた。

「きち、って、誰だよ……」

弼は、ゲームにいそしむ織の小さな背中に向かって、ぼそつと尋ねた。少し結び慣れたポニーテールの上には、例の密閉型ヘッドフォン。緊迫感あふれる戦闘シーンのBGMが漏れ聞こえてくる。

弼は、両手を枕代わりにしながら、カーテンを開け放した窓を見やる。狭い角度の夜空にうつすらと天の川がかかっていた。

誰かが、天の川についてこう言っていたのをふいに思い出す。

「願いを叶えるのは、流れ星でも、ましてや天の川でもない。自分自身だ。願いを叶えると誓った自分を、空から見届けてくれるようにお願いするのが、七夕の短冊なんだよ」

数瞬して、記憶が鮮明によみがえった。

ああ、死んだ父さんの言葉だ。でも、それがいつだったのか、自分はそのとき何歳だったのか、まったく思い出すことができない。思いだそうとすればするほど、暗い霧が脳内を覆う。

しばらくして、弼は、ゆっくりと穏やかな眠りに堕ちていった。

「無邪気な顔をしておって……」

織は小さく息をたてて眠る弼を見下ろし、ベッドに腰を下ろした。

「遙かに小者のくせに、分不相応な願いを誓ったものじゃ」

誰と比べているのかはわからないが、厳しい言葉とは裏腹に、口調は慈しむように優しい。

「よいか、予は聞き届けにきただけじゃ。叶えるのは又シの力じゃ。勘違いせぬようにのっ」

織はいたずらっぽく弼の鼻をつついた。弼は小さく身じろぎし、しばらくしてまた寝息を立てる。

「又シは予の結いを解かせ、新たな結いを与えた。……責任は、とってもらうぞ」

小さく囁いた織の頬は、少し赤かった。

恋は、一度の人生で何度も終わる。それが人間である証拠だ。  
たいていは別れにあざを作り、あざが癒えたころ新たな恋をする。  
だが、同じ個所に何度も大きなあざを作った者は、恋に臆病なら  
ずにいられるのだろうか……



## 第一話（2） 心の穴（前書き）

普通の男子高校生、弼ゆだめの家に突然現れた謎の美少女、織しき。とある出来事のせいで自分の感情を整理できなくなった弼。織は遠慮の無い言葉と態度でそんな彼の生活を変えていく。やがて真理をついた喝を繰り返す織に、弼は弱気な心を突き動かされ。一方、彼女は他にも目的を持っている様子。それはいったい何なのか。彼女の過去は一体……。ツンな織とフツンな弼の、成長する学園物語。

## 第一話(2) 心の穴

### 第一話(2) 心の穴

日が昇ると、部屋の気温はみるみるうちに上昇した。いつのまにか深い眠りに落ちていた弼ゆだめだったが、時とともに増す寝苦しさに、少しうんざりしながら目を覚ます。ヘッドフォンが効を奏し、織もゲームに慣れたおかげで、真夜中に起こされることもなく、寝不足は解消された。それでも、猛暑の陽光はクーラーの冷気を突き抜けて容赦なく弼を襲い、安眠を妨げる。

眠気を帯びた気だるい気分のままテレビの方を見ると……今日もいた。変な和服の少女、織しきはゲーム画面を前にヘッドフォンを外し、髪を縛る紐を結び直していた。

「どう……したの」

「なんじゃ、ようやく起きやったか。朝寝が過ぎるぞ」

後ろ手で髪を束ねながら肩越しに振り返った織の第一声は、相変わらずツンツンした物言い。

「又シの勧める結いは、確かに便利じゃが、すぐに解けるのじゃ」

「え、ポニーテールが？」

「その“ぽにいてえる”じゃ。他のおなごはどう結うておるのかのお……」

少し困った風な織。へえ。女の子にはそんな悩みがあるんだな。

弼は妙なところで感心した。

弼は、過去にポニーテール姿だった身近な女性を思い浮かべてみて、急に落ち込んだ。彼の周辺には常に二人の女性しかいなかったのだ。

第一に思い浮かんだのは、母親。彼女がポニーテールに結わくときは決まって家事をする前だ。背中まである髪が、炊事の邪魔になるのだろ。でも、彼女が髪を結び直しているのを、弼は見たこと

がない。

第二に思い浮かんだのは、近所に今も住んでいる幼馴染みの、真<sup>ま</sup>幌<sup>ほろば</sup>庭<sup>ば</sup>みきな。粥の唯一の女友達である彼女は、今でも同じ高校の同じクラスに通っている。父親が大企業のお偉いさんとかで、何不由なく育った、いかにもなお嬢様だ。そのふんわりとした大人しい性格と清楚な印象を与える顔立ちには特に男子生徒に人気が高く、彼女にファーストネームで呼ばれている粥は、クラスの男どもから羨望と嫉妬のまなざしを浴びている。その視線は常に煩わしいが、時に誇らしくもある粥であった。

彼女も幼いころからポニーテールがよく似合った。長く艶があり真っ直ぐな髪質は、織の髪に似ており、だからこそ粥は織にポニーテールを勧めたのかもしれない。高校生になってからは滅多にしなくなっただが、それでも体育や家庭科の授業のときに、たまに束ねている様子だ。小学生くらいまではよく一緒に走り回ったもので、彼女も、遊んでいる最中に髪が乱れて結び直す、ということとは一度もなかった気がする。

「コツがあるのかもしれないな。母さんに聞いてみるよ」

きつとないけどね、と心でつぶやく。ただ、何か飲みたかったこともあって、粥は一階に降りることにした。

「母さん」

いないと知った上で、台所に声をかけてみた。わかっているのに返事がないと、少し寂しくなる子供のような粥だった。

冷蔵庫から冷えたアルカリ飲料を取り出してコップ一杯分を飲み干してから、居間を見回す。壁にかけてあった紺のスーツが無い。

母親はこの猛暑の中、働き口を探しに出かけている。一方で息子は、夏休みという名の自堕落生活を送っている。

特に強い覚悟の上ではなく、高校を辞めることも考えてみた。しかし、しばらくしてその考えは弾けた。粥は頭を軽く振る。その選択は誰も幸せにならないことに気がついたからだ。

台所に戻り、アルカリ飲料をもう一杯コップに注ぐと、それを持

って二階に上る。

粥の部屋では、ポニーテールをなんとか結び直した織が、またゲームで遊んでいた。その側に無言でコップを置くと、粥は織の後ろ髪を眺めながら、そうだ、と手をたたいた。

「みきなに聞いてみればいいんだ」

反射的に携帯電話をとりあげるが、いざ使おうとすると待ち受け画面が真っ暗だった。そりゃそうだよな、充電してなかったし。粥は電源ケーブルを携帯本体に直接差し、窓から外を眺めながら電話した。

数回のコールで、みきなは電話に出た。

「も、もしも……」

「あ、みきな？ 粥だけど。ちょっと教えて欲しいことがあって」「もう！」

みきなの子らしい声が、突然、粥を責めるように尖った。

「な、なに？」

「どうして連絡くれなかったの！？ 何度も電話したし、メールもしたのに……」

「え、あ……」

もしかしたら、携帯の電源が切れているときに連絡をくれたのだろうか。

「心配したんだから！ お父さん亡くなって……気を落としているんじゃないかって……」

みきなの子の声が少しずつ小さくなっていく。

「ご、ごめん。心配かけた」

「何か、あったの？」

「携帯の電源、切れてた」

「……そんなことだと思ってた」

呆れたというよりは、ちよつと笑っている声に聞こえた。

女の子ってどうしてこうもコロコロと態度が変わるんだろう。さっきまであんなに怒っていたくせに。

弼は、女の七不思議の一つに触れた気がした。

「もう大丈夫？」

「ん、大丈夫。ありがとな」

「そう、よかった……」

みきなは幼稚園に通っていた頃から心配性で、少しでも弼の表情が曇っていると、どうしたの、なにがあつたの、としつこく聞いてきたものだった。高校に入ってからはそのままで頻繁に話す機会も無かつたので、みきなの性格を半ば忘れていたが、こうして小言を言われると昔を思い出す。

同じ幼稚園に通っていた頃の弼にとっては、口うるさい母親がもう一人いるようなもので、ありがた迷惑な存在だったみきなだが、小学校の高学年に差し掛かる頃からどんどん大人びてきた。そのため、弼が彼女に対して幼馴染み以上の感情を抱くようになるのは、自然な流れだっただろう。肝心のみきは幼稚園の頃から変わらぬ小言魔だったが、それは昔からの情性の延長線上にあるものなのか、それとも少しは弼への好意が混じっているのか、弼には判断がつかなかつた。

ただ、思春期まつさかりだった彼は、そんなみきを迷惑がる態度をとりつづけた。それは、恋心ゆえの幼い照れ隠しで、みきなの気持ちを斟酌する余裕など無かつただけなのではあるが、それを彼女がどう受け取ったのかはわからず、次第に互いの口数も減り、高校受験も重なって、中学二年の夏ごろから、ほとんど接点が無くなっていた。

再び会話が成立したのは、奇しくも同じ高校の合格発表の掲示板前。

「おめでとう、ゆだめ」

「……みきなも」

「ちよつと、やせた？」

「徹夜続きたつたから、そうかも」

「もう、睡眠と食事は抜いちゃダメだよ。おばさん心配するよ」

「うん」

みきなは相変わらず口うるさかった。しかし弼は、久しぶりの小言が嫌じゃなかった。彼女の昔の小言を思い返し、すべては自分のことを心配してくれた言葉だったことに、改めて気づいたのだ。みきなも弼と久しぶりに接点をもてたことが嬉しそうで、自然、二人は二駅分ある帰宅路を歩いた。肩を並べながら数年分の溝を埋めるように、昔話に華を咲かせる。それは過去の恥ずかしい笑い話が大半で、受験が終わった開放感もあって、お互いの笑い声が弾けた。

自分の恋心はひとまず脇に置いて、みきなを大切な幼馴染みと認識したのは、このときからである。それは友情以上恋愛未満の感情で、押しつけがましいものではなかった。そのため、現在も二人の間には適度な距離があり、みきなの小言を聞く機会は少ない。だからこそ彼女の言葉は、弼にとってとても大切なのである。

だから、父親の死に向き合えていないことや、涙を流すことができないことなどは、口が裂けてもみきなには言えない。言った途端、急遽、家に押しかけて来る可能性すらある。今、家に来られると、面倒なのが一人……。

あれ。織がテレビの前にいない。弼は、大して広くも無い部屋の中を見渡す。

「何をしておる」

「わっ！」

織は弼と一歩しか離れていない真正面にいた。背が小さいため、視界に入らなかったのだ。

じつと見上げる彼女の顔を見て、弼の背中を冷たい汗が流れた。嫌な予感がする……。上目づかいの織の目線は、弼に向いていない。そしてこの独特なキラキラした表情を弼は知っている。テレビとゲームに食いついたときのそれと同じだ。

「もしもし、ゆだめ？ どうしたの？」

「あ、いや、なんでもない！」

この台詞を吐くとき、たいていは、なんでもないでは済まないこ

とが多い。

「誰かいるの？」

「いやあ、いないよ、いない。ところでさっ……えっ……おっ、ちよ……な……」

織が携帯を持っている腕にぶら下がって耳を近づけてきた。それを咎めて「おい、ちよつとなにするんだよ」と言おうとして、みきなに気取られないように、はばかった。

織は受話口から音が漏れ聞こえるのに興味を持ったらしく、粥の横に顔を寄せてくる。

ばかつ、織つ、近い！ とにかく顔が近すぎる！

他者の体温を顔面で感じた経験の無い粥にとって、少々キツめとはいえ美少女に寄り添われる行為は、顔面の発火とパニックの点火に十分だった。

全身から脂汗を流しながら、近寄ってくる織の顔を引きはがそうと押しやるが、力を入れれば入れるほど織はさらに力を込めて粥にからみついてくる。声にならない格闘が続く。

「……ゆだめ、なんか変」

「ご、ごめん、電波がおかしい！ かけ直す！」

慌てて電話を切る。そして……。

「電話の最中に何してんだッ！」

いつもの喧嘩がスタートだ。

「でんわ、というのか、この小さな箱は」

織は、粥の手から携帯電話を奪い取った。液晶ディスプレイを見て「小さなテレビじゃ！」とひとしきりはしゃぐと、裏返してみたり、ボタンを押してみたり、ためつすがめついいじり倒す。

「先回りして言うとな、遠くに離れた人と会話するための道具だよ」

「そんなことは、先ほどのヌシの様子を見ていれば、よほどの阿呆でもないかぎりわかる」

圧倒的に一言多い。

「予が知りたいのは仕組みじゃ」

「仕組み……って。電波とか、周波数とか……そういうことか？」  
残念なことに、弼にはその手の知識が無い。無いものは、説明のしようがない。

「なんじゃ、男の子のくせに情けないのお」

「男とか女とか関係ないだろ。携帯電話の仕組みは、作った人に聞いてくれ」

ふん、とバカにしたように鼻を鳴らすと、織は携帯電話を弼に投げて返した。テレビやゲームほどの衝撃は無かったのか、飽きるのが早い。そして、携帯を手放すのと同時に、声は低気圧を帯びる。

「で、誰と話しておったのじゃ。おなごの声のようだったが」

「真幌庭みきな。僕の幼馴染だよ」

「なんと！ ヌシにおなごの知己がおったのか！」

目を丸くして驚く織。確かに生まれてこのかたモテたことはないが、そこまで驚かれると弼も面白くない。

「悪いかよ。これでも小さい頃は仲良かったんだぞ」

それを聞いた瞬間、織の眉が短くけいれんした。自慢げな弼の表情が癢に触ったのだ。

「ほおおおおっ！ これは意外じゃ！ まったく、いつさい、おなごには相手にされぬ男の子と思うておったに、どこにそのような甲斐性を持ち合わせておったのか」

「お前なあ……」

こいつの口は、僕をけなすために付いているのではないか。

「しかしなんじゃな！ そのみきなとやらも、ずいぶんとモノ好きであることよ。弼のような、財力も腕力も知力も無く、やる気も根気も負けん気も、なああんにも無い男の子と話をして喜んでおるなぞ、どうかしておる。趣味が悪いとしか言いようが無いの！」

ここまでは、またはじまった、と流していた。しかし。

「きつと、みきなとやらも、大したおなごではないのじゃろう」

この言葉に、弼は力チンときた。心の奥底で火打ち石が鳴る音が



する。

その瞬間だった。織はピクンと体を固まらせ、何かを感じ取ったような顔で粥を見つめた。

どうしたんだ。あれだけ水道の蛇口のように勢いよく僕の悪口を垂れ流していたくせに、急に固まったように動きを止めるなんて。

この表情……初めて見る。例えるなら、ようやく受信したラジオの周波数を、正確に合わせようとする目つきだ。目に見えない何かに、焦点を合わせようと集中しているように見える。

あまりにも長くジツと見つめるため、粥も少し不審がった。

「な、なんだよ」

その言葉に、織は急に合点がいったようにうなずいたかと思うと、眉をつり上げ口角を引きつらせて意地の悪い笑みをたたえ、まるで挑むように睨みを利かせた。

「ヌシはとんでもない勘違いをしておる」

「何をだよ」

「真幌庭みきなのことじゃ。どうやらヌシはみきなのことを悪からず思っておるようじゃが、あのような性悪に十数年も瞞され続けるとは、ずいぶんとお人好しよの」

「……なんだと？」

「……なんじゃ、納得いかぬか。ではこれから、あやつの本性を予が言い当ててやろう」

一呼吸置いた織は、悪意の棘を散りばめたしなやかな言葉の鞭を、粥に向かって力一杯振り下ろし始めた。

「ヌシはあの優しい素ぶりにまんまと騙されておるようじゃがの、あれはヌシを慰めることで上から見下しておるのじゃ。父親を亡くし、苦境に立つヌシを慰めるのは、なんと心地よいことかのお！自分より下の人間を慰撫するのじゃ。それはそれは心地よい快感があることじゃろう。『わたしは人を気づかう優しい娘でございます、なんて気高く美しいのでしょう』とな」

なんだ。なんなんだ。この織から発せられる憎悪は。

「人前で優しく振る舞えば、周囲はきつとアヤツを見上げることであろうよ。『なんとお優しい方か』と。そう言われれば言われるほど、あの女は自己陶醉してゆくのだ。なんと心地よい、皆がわたしを崇める、と。あの優しさは、己が生きやすい境遇を作りあげるための、単なる擬態じゃ」

反論したい。しかしそれを上回る驚きが弼を支配する。

「又シのほのかな好意もアヤツはとうに見抜いておるぞ。それを利用して又シに優しく、馴れ馴れしくしておるのだ。そちらのほうが得じゃからのお！ 人を見下せるからのお！！ なにせ又シは常にアヤツの下で蠢く下等生物じゃからのお！！ どうじゃ。ここまで説明してやれば愚鈍な又シにも見えてきたであろう。あの女は、計算高く、小心で、虚栄心の強い、損得で動く、九尾の狐のようなおなごよ」

えぐるように、見下すように、みきなを罵倒し続ける織。

弼は、怒りよりも数倍強く、驚きの感情が心を支配した。どうして会ったことも無い相手をここまで断定的に悪く言えるのか。彼女の怒りを誘発したのは、みきななどの部分なのか。

一方の織は、軽蔑した声音で、スラスラとみきなが悪口を連ねる。心にも無い笑顔は保身のため。下賤な女ならではの卑屈な態度。行く末は詐欺師か売女か。

織が彼女を貶めることに、弼の怒りは幾何学的な倍率で増幅していく。驚きの感情はとも強いものではあったが、それを怒りが追いつくのは時間の問題だった。

そして。

「所詮、あやつはクズ女じゃ」

この言葉が決定的だった。弼の背中から怒気が陽炎のように立ち上る。

「ふざけんなよ……タダ飯食らいの居候が……。言っていいことと、

悪いことがあるぞ……」

「ほう！ なんじゃ又シ、怒ったか。“力”も“気”も無い又シが怒ったか！」

「……当たり前だ。僕の悪口はともかく」

「詐欺狐の悪口は許せぬか！」

「……ッ！」

弼は強烈な怒りの波動を放った。その表情を見た織は、両目と口角を挑発的に釣り上げる。

その時。

織の釣り上がった瞳が、燃えさかる炎のようにチラチラと赤く光り、弼の瞳を捉えた。

「……！！」

な、なんだ。目が……光っている！？ ば、化け物……！

「なんじゃ、どうした。怖じ気づいたのか。又シの怒りはその程度か」

怯んだ弼をあざ笑うように、織が挑発する。

人間ではない。見た目は少女でも、人の言葉を発しても、こいつの正体は、他のナニカだ。宇宙人か、物の怪の類か、はたまた怨霊か。その化け物は、なぜか弼の大事な幼馴染みを、言葉の限りを尽くして地の底まで貶めようとしている。

……そうだ。こいつは、僕の唯一にして随一の女友たちであるみきなを口汚く罵った。勘違いするな。相手が人間ではないからといって、化け物だからといって、みきなをバカにする権利はない！！ふざけるな……。ふざけるなよ……。ッ！ 弼は再び怒りを増幅させた。

「ほお、驚いた……。これほどとは……。素晴らしい……。はははははッ！！ 素晴らしいぞッ！」

赤い目を残虐に歪ませる織。その顔は、もはやキツめの美少女という形容は成り立たず、誰がどう見ても狂気の悪魔を思わせる形相だった。そして、人間離れた威圧感のせい、小さい身体が弼を

上から威圧するかのように巨大に見えた。やはりこいつは……こいつは人間ではない。下手をすると僕を食い殺すために来た、本物の悪魔なのかもしれない。

しかし……！

だからなんだ！

僕は臆さない。

人間であろうと！

怪物だろうと！！

みきなをイジめるやつは……絶対に許さないッ！！

弼の怒りが頂点に達した。

そのとき。

ピリリリ、ピリリリ。

携帯電話が鳴った。人工音の横槍に、急に現実に取り戻される。

そして。

「言いすぎた。すまぬ。すべて予が悪かった」

織はペコリと頭をさげてあっさりと謝った。先ほどの妖怪じみた威圧感はずでになく、いつもの、というよりどちらかといえば、心静かで少し冷淡なときの織がいた。

「えっ……」

弼は、肩透かしを食らったように怒りの感情をそがれた。狐に化かされたような虚脱感がある。女心と秋の空とはよく言うが、この変わり身の早さはそんな悠長なものではない。

理性ではそう考えたものの、本能で振り上げた怒りの拳は、さすがにやり場に困ってしまった。

「なんなんだよ、まったく！」

こう吐き捨てることでなんとか消化することにしたが、釈然とし

ない思いはどうしても残る。

「電話に出りやれ。好きなように睦み合えばよからう」

織は、弼に背中を向けると、テレビに向かってぺたりと座り、ヘッドフォンを手に取る。

携帯電話のウィンドウには、真幌庭みきなの名前。ピリリリリ、ピリリリリ、という電子音が耳障りに鳴り続けている。

なんだったんだ、一体。

ただ、冷静になって、ひとつだけわかったことがある。

織は僕をわざと怒らせたんだ。あの豹変ぶりはどう考えても不自然だし、いつもの織の言動からみても常軌を逸している。急に謝って、何事も無かったかのように振る舞うその態度がいい証拠だ。

でも、なんのために？

そして、その最中に見せたあの悪魔のような顔はどういうことだ。人間ではないことは、これでほぼはつきりとしたが、それならこいつの目的は？　そもそも根本的な話だが、なぜ僕の部屋に居座っているんだ？　そして、なぜ、“僕”なんだ……？

それらの疑問が、着信音に押し流されるように、ぐるぐると部屋を対流する。

ただ、なぜか思った。

これだけは言っておかなければならない。

そんな気がして、弼は織の背中に話しかけた。

「みきなに電話したのは」

ぴくん、と織の肩が震えた。

「ポニーテールが解けないように結ぶコツを教えてもらったためだよ。そういうと弼は、織に背中を向けて携帯電話を取り上げ、通話ボタンを押した。

「みきな？　ごめん、トイレに行ってた。それでさ……」

織は、被りかけていたヘッドフォンを静かに膝の上に置いた。と同時に床に一杯の飲み物が置かれているのに気づく。一度、弼の背中を見てからそれを手に取って口にした織は、

「美味……じゃ」

と驚いた顔でつぶやき、もう一口飲み込んだ。

「こんなところまで……似おって……」

織は、手に持ったコップを見つめながら小さく小さくつぶやくと、片目だけで振りかえり、弼の背中をじつと見る。その姿は、織の記憶の海にたゆたう爽やかな少年の背中に重なっていく。

織、水じゃ。飲め。そなたは少し短気に過ぎる。

うるさいわ。けほっ……んっ！ んっんっ！

見よ、怒鳴り散らすから喉を痛めたであろう。飲め。清水は冷たくて気持ちよいぞ。

……美味じゃ。

はっはっはっ！ そなたは常にその顔でおれ！ 怒り顔はあまり見とうない。

……むむっ。

自分の都合だけで、自由に生きられる者は存在しない。

人は誰もが、避け得ぬしがらみと格闘し、またはそれを無視し、ときに融和しながら生きている。

稀に、しがらみのおかげで得る安らぎもある。それは麻薬的な甘美を伴うことが多い。

ただしそれは、哀しいまでに短命だ。

麻薬が切れたあとの痛さを、織は、心の臓に針をゆっくり刺されるのに似ていると思った。

「……だからもう、やめよ……優しくするでない……」

弼の背中を見つめるその瞳は、哀しみを揺れていた。

## 第一話(3) 心の穴(前書き)

彌<sup>ゆだめ</sup>は和服の美少女・織<sup>しき</sup>を伴ってショッピングに。そこで会ったのは、幼馴染のみきなだった。一見平静に振る舞いながらも、淡い恋心を胸に宿していたのは……。

## 第一話（3） 心の穴

### 第一話（3） 心の穴

炎天の下、住宅街の小道はかげろうに揺れ、熱せられた空気は蝉の声で震えた。

そんな中、<sup>ゆだめ</sup>弼はだらだらと歩き、<sup>しき</sup>織は嬉しげに跳ねている。

跳ねている、というのは比喻ではない。織はまるで上機嫌な子犬のように、スキップで右へ左へ飛びまわっているのだ。

そんなに動き回ったら汗をかくのに……。加えて、その幾重かに重ね着た和服は猛暑には地獄のほず。

歴史の知識が浅い弼には、どの時代のどのような種類の和服なのかわからない。聖徳太子の時代の女性天皇が、こんな格好をしていたような気がする。昔ばなしの絵本にも、どこかでこんな格好をした姫が登場した記憶がある。が……。さて、どこだったか。何の話だったか。

一方の弼は、Ｔシャツに短パン、サンダルという軽装。それでも日差しの強さとアスファルトの照り返しに辟易する。

この二人が並んで歩くと、とても悪い意味で目立った。弼にはそれが恥ずかしい。

弼は不機嫌そうに聞いた。

「なんで付いてきたんだよ」

「よいではないか。予とて長らく又シの部屋に軟禁されておったのじゃ。たまには外の空気も吸いたい」

人聞きの悪いことを言うな。お前が勝手に居座っているだけじゃないか。弼はそう思いながら隣を歩く織を見下ろす。そう、並んで歩いたことが無かったので今まで気付かなかったが、一七三センチの弼にとって、おそらく一五〇センチも無い織は、“見下ろす”という表現がぴったりくるほど小さく感じる。今どきの女の子なら、



かかとのある靴を履くことでバランスをとるだろうが、彼女はなんと、足袋に草履だ。小ささが余計に際立つ。

「それに、ヌシは色の趣味が悪い。予が身に付けるものは、予が選ぶ」

「はいはい、悪かったね」

ポニーテールが解けないように結ぶコツを真幌庭<sup>まほろば</sup>みきなからリサイチした結果、弼は“ヘアゴム”という物の存在を知った。彼女はそんなことも知らないのか、とは言わなかったが、声音は明らかにそう言っていた。

「結んだところをかわいく飾るシュシュとかもあるんだよ」

「しゅしゅ？」

「綺麗な布で飾ったゴムなんだけど、これだけだとポニーテールはほどこちゃうかな。だから、ヘアゴムできつく縛って、その上にシュシュを付けてる子が多いよ」

「へえ……」

「髪、長いの？ ゆだめの彼女」

「……かつ……彼女！？」

「彼女できたんでしょ？ そんなこと聞いてくるくらいだし」  
しまった。普通に考えれば、そうとられてもおかしくない。

「そ、そんなんじゃないよ。ほらー、あれだ。なんだ。……そう、小説！ 今、自分で小説を書いていてさ。そこにポニーテールの女の子を出したくて」

「……うそ」

「……う、うそじゃねーよ」

「ゆだめ、うそついてるときのクセがあるんだよ。だから私、ゆだめのうそはわかるんだ。小さいときから全然変わってないんだもん」  
「……うそでした」

みきなが、電話の向こうでクスツと笑った。

「素直でよろしい。シュシュとかヘアゴムとか、男の子が買いに行

くのはちよつと勇氣いるよ。女の子用の雑貨屋さんだし」

「そ、そうなのか!？」

「その……付いてつてあげても、いいんだけど？」

弼は躊躇した。いつもなら気にならないみきな言い方に、なぜか今日は反応したのだ。

あの優しさは、己が生きやすい境遇を作りあげるための、単なる擬態じゃ。

又シのほのかな好意もアヤツはとうに見抜いておるぞ。

ちっ、織のやつ。余計なことを言いやがって。違うとわかっていても気にしちゃうだろ。しかも「言いすぎた」と急に謝るもんだから、逆に記憶に残って仕方が無い。

弼は、今までになかった意地のようなものが芽生えていることに気がついた。みきな助け舟に乗るのは簡単だ。しかし、そのことを織が知れば、馬鹿にしたような薄笑いで何を言うかわからない。それは耐えがたい屈辱である以上、弼はみきな提案を素直に受け入れることができなくなっていた。

「いや、いいよ。一人で行く」

「……えっ？」

「外、暑いしさ。悪いし。ありがとな。助かったよ」

「……うん」

そうして一人家を出た弼だったが、後から走って追いかけてきた奇妙な和服の織を見たときは、暑さのせいではない汗が大量に噴き出た。悪目立ちするのは苦手だ。あまりそういう恥ずかしさに慣れていない弼である。

それにしても、と歩きながら考える。

あの織の急激な変化は何だったのだろうか。彼女が意味もなく“人ではない”姿を弼の前に晒すわけがない。もし弼が強烈な拒絶反応を起こし、力ずくで彼女を追いついたらどうするつもりだったのか。それこそ本当に、頭から弼を食い殺すつもりだったのだ

ろうか。

さてよ、そもそも僕はなぜ織を家に置いておくんだ。そんなに迷惑なら、それこそ力ずくで追い出せばいいじゃないか。理屈では弼もわかつている。何度となく出て行って欲しいと思った。しかしそう思うたびに、あることを思い出し、それが気になってしまふのだ。

「ヌシの願いを聞き届けてやった」

初めて会ったとき、織が不機嫌そうに言った言葉。これはいい、どういう意味なのだろう。叶えてやる、でも、叶えてやった、でも、聞き届けてやる、でもない。 “聞き届けてやった” と織は言った。今までも何度か疑問には思ったが、その都度に結論を出すことを諦めていた。

新たな判断材料が加わったわけでもないのに、結局この問題は解決しないのだが、それでも弼は、織が人間ではないことに何か関係がある、ということまで考えた。そして、いつものようにいさぎよく思考を停止した。

なんにせよ、今の織は機嫌がいい。こんなに机上機嫌な織を見たのは、ゲームで遊んでいるときを除けば初めてだ。そして小さい。悪魔の形相のときの織は恐ろしい巨人に見えた。たぶん自分の膝と魂が縮こまったせいで、二〇センチ以上ある身長差が逆転したのだと思う。

はぁ……。このままなら、かわいいのに。

そう思っただけで苦笑した。 “咬まなければかわいいのに” と言っている犬の飼い主と、心情が重なった気がしたからだ。

人間なんて身勝手なモンだな。

自分が織を犬と同列に考えていることに気付いて、弼は笑いの衝動がこみあげてきた。だが、その笑いを必死でかみ殺す。なぜなら横で跳ねている人型のワンコは、そういう弼の心情に大変タイヘン敏感な生物だからだ。

「よからぬことを考えておらぬか」

ほらきた。じとつとした目で睨む織が行く手を阻む。

「被害妄想。自意識過剰。暑苦しいから僕の視界の外で跳ねてくれ」  
彼女の横を何事もなかったかのように通り過ぎる弼。必要以上にツンケンしたのは、笑いを喉の下で食い止めていたから。そうとは知らぬ織は、不満顔で一步後ろをついてくる。しばらくは大人しく歩いていたのだが、じきに遠慮がちにぺたんぺたん草履が跳ねる音が聞こえてきた。弼は必死で笑いをこらえながら歩を進める。

あれ、心が、軽くなっていないか。

ふと気づいた。父親の葬式からこのかた、これほど心が浮き立ったことは無い。日がな一日ベッドに寝ころび、泣けないことに悩み、階下の母親を敬遠し、世間との接触を拒絶し続けた日々が遠い過去のように思える。やはり、織が僕の部屋に居座りだしてから、負の連鎖が止まったんだ。寝不足に悩み、罵声を怖がり、織との関係を疑問視し続けていたら、いつのまにか。

そうか。手順はどうであれ、今僕が笑えるのはこいつのおかげなんだ。初めて感謝の念に近い思いを抱く。その途端、織に対する見方がドミノのようにパタパタと音を立てて変わっていくのを感じた。人間ではないかもしれない。でも、もしかしたら、僕にとって大切なヤツなのかもしれない。

弼は振り返らずに声をかけた。

「織」

「……なんじゃ」

「お前、車って知ってるか」

「知っておるわ！ 牛が牽く貴族の乗り物であろう」

「残念、違う。僕の知っている限りでは違う」

「で、又シの知っておる車がどうした」

「お前の知っている車より数倍速く走る機械でさ、道路側に立っているときにぶつかる危険なんだ。目を離すと轢かれそうで怖いから、横にいてくれ」

背後で跳ねる音が止んだ。どうやら立ち止まったようだ。弼も立ち止まって振り返る。

織は、俯いて顔を真っ赤にしていた。弼の耳に小さく「やめよ」とつぶやいた声が聞こえた。

「え、何が。どうした織」

「どうもせぬわっ！ バカモノッ！」

急に怒鳴ったかと思うと、すたすたと弼を追い抜いて早足で歩いていく。弼は、何だよ、と訝しがり、実際に小さく口に出した。

その時、弼の耳が車の駆動音を捉えた。これは……勢いよく走ってくる車の音。

首筋に冷や汗が浮き出る。織が早足で小さな交差点に差し掛かっているのだ。弼は、恐怖で心臓を鷲づかみにされたように立ちすくんだ。

いや！ 大切なヤツかもしれないんだ！ 怯えるな！ 一歩、前へ！ 間に合えッ！

「危ないッ！……」

パアアアアアアアアアアアッ！！

弼は織の腕を強く引き、車は乱暴なクラクションを残して走り去った。

……足が、震えている。手も、だ。  
危なかった……。

心に怒りが湧いた。こんな細い路で飛ばしやがって！ もう少しで織が……。そうだ、織は……。

弼が守った織は彼の腕の中にいた。儚げで小さな体は身じろぎひとつせずにかチンコチンに固まっている。弼はそれを、恐怖のせいだと解釈した。

ふつつ、と気持ちを落ち着かせる息を吐き、手足の震えが少し収まったのを確認すると、織の頭を胸に抱え込んでいた腕の力を緩め

る。

「大丈夫か」

織はカチンコチンのまま、こくりとうなずいた。その小さな肩を両手で掴んで自分の足で立たせる。

「初めて見たな。あれが、車だ」

織は、また黙ってこくりとうなずいた。

それからの道中、織は弼のシャツの背中を掴んだまま、俯きつばなしで歩いた。大変歩きづらかったが、弼は文句を言わなかった。理由はともかく、そうするべきだと思ったのだった。

自宅と高校の中間地点に、大型のショッピングコンプレックスがある。弼たち学生はここを遊びの拠点とすることが多い。もちろん主婦の御用達でもあるため、平日の午後は付近の道路が渋滞するほど人であふれかえる。カラオケやボーリング、映画館などの娯楽施設はもちろん、食料品、生活用品、衣類店、雑貨屋、日曜大工店、おもちゃ屋、眼鏡屋、本屋、CDショップなどが軒をそろえ、日常生活に必要なものはここに来れば一通り手に入る。また、病院や美容院、楽器屋、家電量販店、レストランにフードコートなども開業しており、ひとつの小さなショッピング街がまるまる入ったような作りになっているのだ。

何か必要になったらここに来ればよい、と弼は思っている。ただかへアゴムひとつを買うだけのために、と普通なら少しは考えそうなものだが、そこは女子との接点が極めて少ない男子の哀しい性女の子が普段使いするグッズを揃えるお店の存在など、知る由もない。知らない、というのはそれだけで余計なエネルギーを消費するものなのだ。

織は、あまりに巨大で華やかな場所に、圧倒されていた。特に建築の構造に心底驚いている様子だった。このショッピングコンプレックスは中央が大きな吹き抜けとなっていて、その端に上り下りのエスカレーターが複数台行き来している。正面口から入店すると、そ

の巨大な吹き抜けが六フロアにわたってぶち抜かれている光景を一望できる。最初に訪れたときは弼ですらそのスケールに圧倒されたものだ。人間、何かに圧倒されると呆けたようになるが、織もその方程式から外れることなく、めいっばい呆けている。感情とそれに付随する表現方法は、人間のそれと何ら変わることはないのだな、と織を化け物と断定して再確認する弼だった。

案内板を見てエスカレータを六フロアまで昇り、目的の店を前にして、弼は戦慄した。

もしかして、この店に入らなければならないのだろうか……。

中学生から大人まで幅広い年齢層の女性たちが、代わる代わる小さなアクセサリを手にとっては戻すという行為を、小鳥のついでのように繰り返ししている。スチル製のスタンドに所せましと飾られるピアス類。女性らしい曲線をモチーフにした色鮮やかなリングたち。アクセサリ、髪留め、ブラシ、文具、財布、バッグ、傘、CD、キャラクターグッズ……。ピンクやオレンジを基調にした色鮮やかなアイテムが目白押しだ。どれもが弼の人生と交わる予定の無いものばかりである。

みきなと言った意味がようやく理解できた。これは確かに入りづらい。付いてきてもらえばよかったと猛烈に後悔する。たかだかヘアゴムを買うだけなのに。

そうだ、お金を渡して織に買いに行かせればよいのではないか。

「織。あれ？ おーい……」

助けを求めようと背後に声をかけたが、そこにいるものだと思っていた織の影がない。周囲を見渡すと……いた。吹き抜けから階下を2フロア見下ろしたその先で、織はおもちゃ屋にハマっていた。案の定、ゲームの試遊台で遊び出している。それにしても……。

「こんなに遠くからでも、ずいぶん目立つなあ、あいつ」

時代がかった和服姿にポニーテール。しかもミクロな美少女が、モンスターをなぎ倒すゲームに夢中になっているのだ。そのうちオ

タクの聖地でコスプレイヤーとしてスカウトされるのではないか。今まで彼女を外に連れ出したことが無かった分、初めてオタク文化と織の親和性に気づいた弼だった。

「ゆだめ？」

耳慣れた声に振り向くと、そこには、みきなが立っていた。

白地に黒の水玉模様が涼しげな薄手のブラウス。胸元には同じ柄のリボンが。脚を大きく出したベージュのキュロットスカートは、端をレースで飾っている。足元は足首までクロスした少し大人っぽいレザー紐のサンダル。清楚ないまどきのお嬢様を象徴するファッションで全身を隙なく固めている。

弼の目線から表現すれば、白い上着にスカート姿、だ。しかし、みきならしいという感想を抱くくらいはそのファッションを評価している。そして、相変わらずモテそうだな、と思う。

それ以上に弼は、心の底から安堵した。

「なんでお前……でも、た、助かった……」

「もしかして、このお店に入ろうと思っていたの？」

「……うん」

「勇気あるね、ゆだめ」

「その勇気を振り絞る手段について、自己内会議を開催していたところ」

丸めた手を口にあてて、小さく笑うみきな。

「討議の行方はいかがですか」

「……紛糾しております」

みきなは耐えきれずに声に出して笑った。そして、笑顔で弼の顔を見ると、前向きなレスキューの姿勢を見せてくれた。

「もー、買ってきてあげるよ。どんなシュシュがお望みの、彼女さんは」

「いや、彼女じゃなくて……あと、ヘアゴムで良くて……」

「……えっ？ ヘアゴムを買いにわざわざここまで来たの!？」

「う、ん。おかしかったか？」



「呆れた。ヘアゴムなんてコンビニでも売ってるよ」

「そ、そうなのかつ!？」

コンビニなら、自宅から徒歩三分のところにあっただのに……。

「ついでだからシュシュも買っていけばいいじゃない。どんなのが似合う人なの？」

「えっ……いや、いいよ。それならコンビニで買うから」

「だーめ。喜ぶと思うよ、彼女さん。かわいいの選んできてあげるから! ポニーテールにすることが多い人なんでしょ? どんな色の服を着るの？」

矢継ぎ早なみきな勢いに、たじたじになる弼。彼女への贈り物と断定してしまったことに抗議する暇もなく、色について質問された弼は、必死で織の格好を思い出す。フロアの下を覗き込めば階下にいるのだが、関係の解説も、弼の心情も、絶妙に複雑骨折しているので、みきなに勘付かれたくない。

織の着ている服がどんな色なのかを、弼の表現力で伝るというのは酷な話だ。何しろ、緋色や菖蒲色など、和の色が重なり合っている。よって、こういう言葉になってしまう。

「……えつと……赤とか紫とか……」

「へえ、ビビットな色が好きなんだね」

みきなは、それぞれ色別にコーディネートを頭に思い浮かべていた。派手な人なのか、とまで想像している。

「服装は？」

「ふ、服装!？ え、と……わ、和服？」

その言葉に、みきなが一瞬身構えた。

「……年上? ちょっとゆだめ。まさか、人妻じゃないよね」

「ち、ちがッ! ばかつ、変なこと言うなよ!」

「わかったわかった。じゃあ、色味の少ない大人っぽいのを選んであげる」

弼の返答を聞かずにみきは店に入っていく。勘違いされたままにいるのはどうにも居心地の悪いものではあるが、なんとか目的は

達することができそうなので、粥はホツと胸をなでおろした。

柱に体を預けて、みきなの買い物を眺めて待つ。彼女は、いろいろと手にとっては見比べ、戻し、を繰り返している。しばらくして、粥に視線をよこし、肩くらいの高さにひとつのシュシュを掲げて見せる。薄い紫と緑のちりめん地で、確かに織の格好に似合いそうだ。首を軽く縦に振りながら、

「女の子って、すげえ」

と妙に感心した。続けてU字ピンやらかんざしやらヘアクリップやらを掲げ出したので、慌てて全部に手をクロスして要らない旨を伝えた。ちよつと不満そうなみきなだったが、ひとつづなずくと、レジに並んだ。

「はい、どうぞ。プレゼント包装はしてもらわなかったけど、いいよね」

「い、いいに決まってるだろ！」

みきなが差し出した紙袋を受け取ると、千円札を無造作に差し出した。

「えっ、大した金額じゃないからいいよ」

「何言ってるんだ。ダメに決まってるだろ」

「……あ」

みきなは両手を口の前で合わせた。

「そっか。ゴメン！ 気が利かなくて！」

粥はみきなの反応に首をかしげ、数秒してその真意に気づき赤面した。彼女へのプレゼントを別の女の子に買ってもらう、という男として最低な行為の図式が、ようやく粥の頭の中に形を成したのだ。「ばっ、ばか、違う！ そういうんじゃないって！」

「じゃあさ……」

慌てて言い繕おうとする粥から、みきなは意味ありげに視線を外した。

「そのお釣で、お茶でもおごつてよ……」

みきなは小さな提案をした。しかしその控えめさとは裏腹に、彼女がこの言葉を紡ぐには莫大な勇氣と鼓動の加速が必要だった。特定の相手という障害を認識したうえで、二人きりの会話の時間を得ようとしたのである。あらゆる面で弼に誤解されてもおかしうはない。

だが幸か不幸か、その真意を理解するほど弼の感性は敏感にできていなかった。表情ひとつ変えず、ああ、それくらい何てことないよ、と答えようとしたその時。

「弼えええええエエエエエエエエエエツ！」

つんざくような織の音が、大きな吹き抜けの2フロア分をもともせず、弼の鼓膜を打った。

弾かれたように吹き抜けに駆け寄り、手すりに体を預けておもちゃ屋を見下ろすと、織の周囲に大勢の人だかりができており、何か言い寄られている様子が目に入った。弼と目線が合った織の表情は、明らかに助けを求めている。客に余計な説教をしてトラブルでも引き起こしたのか。化け物だとバレて警察沙汰にでもなったか。お金の概念を知らずに万引きと勘違いされたか。試遊台を破壊して店員に詰め寄られているのか。とにかく織が加害者である想像しかできなかった弼は、全身から冷や汗が出た。

「すまない！ みきな、また今度！！」

弼は千円札をみきな右手に握らせると、全速力で下りのエスカレータに駆けていった。その後ろ姿に呼び止める声をかけようとしたみきなだったが、弼の姿はすでにそこには無かった。しばらく呆然とした後、みきは俯いて受け取った千円札を広げる。そして、そりゃそうだよねえ……あーあ……と心の中でため息をついた。

そのとき、下りのエスカレータが突如騒然とした。「キャッ」「

あ、危ねえな！」という悲鳴や怒号をかき分けて、「ごめんなさいッ！」と弼の声が聞こえる。弾かれたようにみきは顔を上げた。弼は息を切らしながらエスカレータを逆走しきると、彼女に向かって、

「みきな、ありがとな！」

と紙袋を小さく掲げた。

「……どういたしまして」

みきなが少し笑ったのを確認すると、弼はまたエスカレータを駆け下りて行った。

疼く心は恋心とは限らない。なぜなら、失恋しても心は疼くからだ。

誰が言ったか忘れたが、みきはそんな言葉を思い出していた。

私のこの心の疼きは、どっちなんだろう。

みきな自身にも、それはわからなかった。

## 第一話（4） 心の穴 了（前書き）

弼<sup>ゆだめ</sup>と織<sup>しき</sup>はショッピングコンプレックスの帰り道、最悪の危機に陥る。弼は織を守りきれぬのか。そしてその後のふたりは……。第一話終了。

## 第一話(4) 心の穴了

「なんなんだよ、あの店長！」

シヨッピングコンプレックスからの帰り道。彌ゆだめは憤っていた。

「怒るでない。店長は予の美しさゆえに声をかけて参ったのであるから」

「だったら助けを求めるなっ！」

織しきの叫び声を聞いた彌は、みきなに礼を言っておもちゃ屋の前に全力疾走で駆けつけた。織は大勢の男性客たちに取り囲まれており、彌は人の壁をかき分けてようやく彼女の前にたどり着くと、信じられないものを目にした。

肩から“アキバ人気No.1コスプレイヤー”という手書きのたすきを掛けられた織が、列をなす男性たちに次々と握手を求められていたのだ。

「さあさあ寄つてらっしゃい見てらっしゃい！ 我らが聖地から当店に足をお運びくださった超人気コスプレイヤーさんだ！ 当店のチラシを受け取ってくれたら今なら彼女の握手付き！ 握手しとくと今夜は二次元の夢が見られるってえ噂だよ！」

店長らしき女性がバナナのたたき売りよろしく頭にタオルを巻いて威勢よく声を張り上げている。二次元の夢っていったいなに！？ と彌は心のなかでツツコンだが、とにかく彌はまだ若そうな店長の肩を掴んだ。

「おい、これはどういうことだ」

「お客さん、握手は並んで！ 列を乱しちゃだめですよ！」

「そうじゃない！ こいつは僕の連れなんだ。なんでこんなことになっている！」

彌がそう言うと、店長の女性はずりおちたメガネを人差し指で押し上げながら、商売っ気たっぷりの笑顔で得意げに言い放った。

「ああっ、彼女、やっぱりプロだったんですか。マネージャさんで

すね。ギャラの交渉はご本人にしましたから、文句を言われる筋合いはございませんよ」

「はあっ!？」

織を振り返ると、彼女は額に汗を浮かばせながら、チラシを渡しては握手、チラシを渡しては握手、を繰り返している。何とか苦心の上の笑顔を取り繕っているようだが、どうみても楽しそうではない。

「ギャラの交渉とか意味がわからん! とにかく連れて帰る」

「ちよっちよっ、ちよーっと待った! わかった、時給890円! うっん、900円にするから!」

10円単位のせこい交渉と、あまりに安いギャラに、元値はいくらだ! と心で叫ぶ。だいたいタレントは時給で働かないだろう、といったんは呆れたが、いやいやいや、この店長は根本的にあらゆることを間違っている! と冷静になつて思いなおす。粥は織の手を掴むと、たすきとチラシを店長に押しやり、強引に連れだした。背後からは

「あゝ、ボクの巫女さんがあゝ」

という男性客たちの声が聞こえてきたが、知るか! ていうかこの格好、巫女じゃねーだろ! と毒づきながらシヨッピングコンプレックスを早足に出たのだった。

「しかし又シの世界は面白いのう。こんなにも人から握手を求められたのは初めての経験ぞ」

少しホクホクした顔の織。

「コスプレオタクにモテても嬉しいんだな」

「おや……又シ、まさか、妬いておるのか」

「誰が!」

「ならば良いではないか。アヤツらの嗜好・趣向に賛同するものではないが、予は理解はするぞ。手を握ることにどれほどの価値があるのかはわからぬが、アヤツらも楽しそうにしておった」

まったく、こいつの感覚には付いていけない。憤りを通り越して、呆れる領域にまで達観した弼であった。二人は、各々の感情を道連れに、行きに通った路を再び踏みなおす。

「ところで又シ、予の小物は揃うたのか」

「ん」

弼は小さな紙袋を織に付きだした。不思議そうな顔で受け取った織は、がさごそと袋を開くと、少女のような感激を顔に浮かべた。10本ほどの黒いヘアゴムを小さなシールで束ねたものと、ちりめん地のシュシュを袋から出して手に取る。

「こちらが髪を束ねるための紐が。して、これは……なんじゃ」

嬉しそうに聞く織。たかだか千円の出費でそこまで喜ばれると、

弼も悪い気はしない。

「シュシュって言うらしい。束ねたところに巻くんだそうだ」

「……布の髪飾りじゃの。又シの趣味も悪くない」

弼はもちろん、みきなを選んでもらったことを言うつもりはない。多少の後ろめたさはあるが、別にみきなと織の間に接点が生まれることもないだろうし、と軽く考えた。しばらく後に弼は自分の甘さを呪うことになるのだが、それはまた別の話だ。

上機嫌の織が横で跳ねているのを、朗らかな気持ちで眺めていた弼だったが、例の空き地のある坂の途中で、急に表情を険しくした。あいつらは……。

この近所にナンコーという略称で有名な高校がある。正式名称を県立鳥居南高校といい、その生徒たちは札付きの悪童ばかりで、大人ですら怯む過激な悪事を次々と働いているともっぱらの噂だ。中でも色黒でタンクトップ姿のピアス、キャップを斜めに被った猿、身長一八八を超えるロングの三人は悪事の頂点を極め、とにかくそのうちの一人でも見かけたら避けて通れと言われている。

その三人が、道の真ん中に座り込みながら、煙草を吸っていた。手に大量の汗を握る。これはまずい。レベル1の勇者が遊び人だ



けを連れてラスボス三体を同時に相手にするようなものだ。気付かれないように別の道を通って帰るのが上策だろう。腹をすかせた狼の群れの前で逃げる準備をする兎のように、弼は足音すら消しながら元来た坂道を下ろうとする。

「弼！ 帰り道はこちらであろう。どこへいくのじゃ」

あッ遊び人のばかりあつ！ 誤って小枝を踏んでしまった兎の心境で体が固まった。後ろを振り向くと……。

「おやおやおや……」

三人が立ちあがってこちらを見ながらニヤニヤと笑っている。そして、色黒ピアスが体を左右に揺らしながらゆっくりと歩いてきた。それを見た後ろの二人も煙草の吸殻を投げ捨てる。これは今からでもいいので走って逃げるべきではないか。しかし織は彼らを気にする様子もなく歩きだしているし、自分の足はすくんで言うことを聞かない。

これは……ヤバい……。

「かわいいねえ、なに、そのカッコ？」

色黒ピアスは短パンのポケットに両手をつっこみ、体を曲げながら、猫撫で声で織に話しかけた。

「芸能人なの？ ねえ、そうなの？」

「芸能人とはなんじゃ。すまぬが予は家に帰るところでな。邪魔立てするでない」

織は普段と変わらぬ声で返事をする。無知ゆえの鈍感さなのか、それとも生来の偉そうな態度がそうさせるのか、彼女に怯んだ様子は一切ない。すると、後ろで見ていたキャップ猿が、特徴のある猿のような笑いと共に織の前に立ちふさがった。

「ぎゃっひっひっ、なにコイツ！ キャラに入り込んでるんですけど！」

「なんじゃ。どきやれ、邪魔じゃぞ」

「罰ゲーム？ コスプレ？ そのかつこでエッチなことするの？」

ぎゃっひっひっ」

「おっ、マジかよ。いいなあ、混ぜてほしいなあ」

二人は前に進もうとする織の行く手をふさぐ。

ようやく織は、彼らが自分に危害を加えようと絡んできており、そして侮辱していることに気づいたらしい。織の目つきが急に鋭くなる。そして、急に目と口をゆがめた。

「ふふふ、又しらも、なかなかかわいいぞ」

な、何を言い出すつもりだアイツ。

「おっ、話がわかるじゃん。ねえねえ遊ぼうよー」

「又しら、スライムみたいな顔をしておる」

「……スライム？」

「おや、耳はあるんじゃの、スライムのくせに」

織は、弼がしょっちゅう食らっていた、あの心の底から軽蔑したような声を吐いた。

「ニヤニヤとした顔つきで集団で自ら寄ってきおり、勇者にめった斬りにされる、一番弱っちいアレじゃ。徒党を組んでおなごを囲おうとするあたり、あのケダモノと並べても遜色ない。のお、弼」

ひいひいひいっ！ は、話しかけんなよっ！

場の空気がカキン、と音を立てて凍った。今まで黙っていたデカロンゲが弼の前に立ちはだかり、鋭い眼光で見下ろすと、小さな子供を相手にするように膝をかがめてドスの利いた声で言った。

「……おいおい、キミの彼女、ずいぶんと威勢がいいねえ」

極悪三人組は同じ年の高校一年と聞いていたが、実際に目の前にすると別次元の人間のような威圧感がある。弼は完全に戦意を喪失していた。

「……す、すみません」

「何を謝っておるか！ 予が侮辱されておるのに、謝る奴がおるか！」

織は凜とした態度で怒気を発した。

しかし色黒ピアスは聞こえないふりをして、口調だけ優しく弼を

脅す。

「じゃあ、さ、キミ。この娘の間違ひは、この娘に払ってもらっていいよな」

「えっ……」

「もちろん、体で」

なっ、なんてことを言いやがる！ 心の中は怒りで満ちるが、手足がしびれたように動かない。かろうじて口が

「い、いや……」

と拒絶らしき言葉を発する。すると色黒ピスは突然いきり立ち、弼の胸倉を引きちぎらんばかりにねじり上げてきた。弼の襟元が締めまり、息苦しさにつめき声が漏れる。

「……じゃあテメエが払うか！ アアッ!？」

「ぐっ……うえ……な、に？」

「もちろん、金で」

「ぎゃっひっひっ！ 別に体でもいいけどよっ！」

キャップ猿が弼の尻を卑猥になでる。

「いやいやいや、それはさすがにムリっしょ！」

デカロンゲが気持ち悪そうな顔でつつこみ、三人が同時に下卑た声で笑う。

織を見ると……。

僕をじっと見ている。静かに。まるで試すように。

そんな目で見るなよ。敵いっこないよ。

「逃げるのか」

織は言った。責めているのではない、事実をただ確認するような、冷めた声。

「男の子としての矜持おのこを捨て、ただ、逃げよるのか」

「おいおい、彼女さん、変なこと言いだしたよ。キミいっ、逃げたほうがいいと思うよぉ」

「ぎゃひっ！ 抵抗しても結果は同じだよぉん！」

ドン、と突き飛ばされ、尻もちをつく。力では敵わない。人数でも敵わない。武器になりそうなものも助けを呼ぶ道具も、何もない。抵抗する手段を見いだせない弼の心は絶望に支配された。

「はやく行けよ…… オラアッ！」

デカロンゲが弼のみぞおちをしたたかに蹴りつける。

「ぐおえっ……」

「弼エッ！」

弼は、息がつまり、身動きも取れず、うずくまって転がるしかできなかった。織は弼に駆け寄ろうとするが、色黒ピアスが後ろから抱きついて離さない。

なんで……こんな……目に……。

一方の織は怒りを目に宿して奴らを睨みつけている。

「…… オイ、小僧。早く行けよ。もう一発欲しいか？」

デカロンゲはうずくまる弼の髪をわしづかみにして、無理やり立たせた。フラフラとした足取りで、弼は坂道を登っていく。

「ぎゃーっひっひっ！ 早く行けよ！ 歩いてんじゃねーよっ！」

キャップ猿が弼の尻を蹴りあげた。前につんのめりそうになりながら、弼は、織とすれ違う。

織は、最後まで弼を見ていた。

弼は、最後まで織を見なかった。

そして、走った。後ろを振り向かずには走った。背中から三人の笑い声がする。

弼を見ている織の姿が脳裏から離れない。その手には、買ったばかりのヘアゴムとシュシュの入った紙袋が。

胸に押し寄せるコレは何だ！ 手足を震わせるコレは何だ！ 僕の存在を否定するコレは何だ！

弼は、叫んだ。

「ちつくしよおおおつつつ!!!」

全力で、走った。

心の中で、中途半端に貯まった水が、ちゃぷちゃぷと揺れた。

最後の最後まで、坂を駆け上がる彌を見届ける織。そんな彼女の前にぬつと顔を突き出したデカロンゲは、

「あれれえ、彼氏さん、逃げちゃったよ」

と言つて織のあごに煙草臭い手で触れた。織は顔をそむける。

「みつともないねえ、キミの彼氏。俺達のほうがずっと優しいぜえゝ。いいところに連れてつてやるからよ……」

後ろから抱きついたまま色黒ピアスが織の耳元で囁いた。いやらしい手つきで織の胸元をまさぐるうとする。

「みつともない、じゃと?」

織が、雷鳴の尾のように低い声でつぶやいた。

「……アン?」

色黒ピアスの手が織の胸の掛け合わせの上で止まった。

「みつともないのはどちらじゃ。徒党を組んで力づくで女を手籠にしようとする卑怯者どもが」

「……んだとお?」

「彌は、最後の最後までここに踏みとどまったぞ。そちらが力で脅すまでは」

三人は、今度は小さく、そして低く笑い声をたてた。

「でもさ、キミの彼氏、逃げちゃったよ? 抵抗も何もしないで、すたこら走って逃げちゃったよ?」

「ぎゃっひっひっひっ、そのコあんまイジメンなよゝ。これから、もっと泣かすんだからさ」

織は、全身の力をバネのように解き放った。

色黒ピアスの腕の中からするりと抜け出ると、三人を見下ろす位置まで坂を駆け上がり、振り向いて仁王立ちした。粥が“プチ仁王”と称した、凄味の利いた笑顔で、腰に手を当てて。

「粥を甘くみるでない。予が選んだ男の子じゃ。二万五千年ぶりに選んだ男の子なのじゃ」

三人は、一瞬あつけにとられて押し黙った。そして、うすら笑いを浮かべながら、織に近寄ってくる。

「おやあ、もしかして電波系拾っちゃった？ 頭、大丈夫ですかあ」

「もう、拉致っちまおうぜ。顔も……体も良さそうだしな。ふへへっ……」

「できるものならやってみよスライムども。雑魚は、倒されるために存在するのじゃぞ」

「このアマ。調子に……」

色黒ピアスが織の細い手首をつかもうとしたそのときだった。坂の上から、相手を殺すために突撃する戦国時代の兵士のような唸り声と共に、シャーッというベアリング音が聞こえてくる。音は織の背後で徐々に大きくなって来る。織がニヤリと笑った。不審に思った三人は、彼女を避けて左右にその後ろを覗き込んだ。そこには……。

下り坂を爆走する、自転車に乗った粥の姿が！

呆然と見ていた三人に向かって、自転車は恐れも知らずに突撃し始める。空き地に放置されていた迷惑な放置自転車は、時速40キロを超える滑車の武器と化し、回避する暇を与えずにデカロンゲに衝突した！

「ンガッ！」

デカロンゲのみぞおちに、先ほどの蹴りのお返しとばかり自転車ごと体当たりする弼。自転車がぶつかった衝撃で、弼は体を前に投げ出されるが、その勢いを借りて肘をデカロンゲの顔面に打ち込む。巨体がスローモーションのようにゆっくりと倒れ、完全にノックアウトした。弼は膝をアスファルトに擦り、血を噴き出しながらも、目を鋭く光らせて立ちあがる。残りのふたりは、驚きのあまりに尻もちをついた。

織は鋭い顔つきで叫ぶ。

「ひとオオオオオオオオッ！」

その声を聞いて、弼は吼える！

「ぐうおおおおおおっ！」

体にかんりの衝撃を受けているはずの弼は、痛みなど微塵も感じさせない力強さで再度坂を駆けあがる。

「又しら、いつまで尻もちについておる。はよう逃げんか。そこにおると……」

二人を見下ろしながら、織は目を炎のように光らせた。二人に怯えの表情が宿る。

「……死ぬぞ……」

不吉な織のつぶやきとともに、その背後からシャーッという音が。新たな自転車にまたがった弼が、怒りの塊となって坂道を駆け下りてきた。

「う、うわっ」

「マジかよ！」

その勢いに完全に吞まれた二人は、気絶している仲間を置いたまま、逃走し始めた。

織の真横を時速40キロの攻撃兵器が通り過ぎ、色黒ピアスの背中に体当たりする。吹っ飛んだ弼の頭が、相手の後頭部にガンツと鈍い音を立ててぶつかった。色黒ピアスは白目を剥いて、崩壊するビルのようにゆっくりと崩れ落ちる。

「ふたアアアアアアッ！」

再び、織が叫び、粥は吼える！

「おおおおおおオオオオオオオオオオッ！」

肘を擦り？き、側頭部を地面に叩きつけながらも、再度坂を駆け登ろうとした粥の前に、織が立ちふさがった。そして、体ごと抱きかかえると

「もうよい。……みつめは、戦意喪失じゃ」

と、血を流している粥の顔を愛おしげに見つめた。

腰を抜かして情けない姿で逃げるキャップ猿を視界にとらえた粥は、くらのげのように全身の力が抜けていくのを感じ、その場に座り込んでしまった。そして、そのまま昏倒した。

遠のく意識の中、織の声が聞こえた気がする。

「無茶をしておって……じゃが……」

どうやって帰ってきたのか全く覚えていないが、粥は自宅の居間のソファで意識が戻った。全身がばらばらになったように痛い。

肘、膝、側頭部、体のあらゆる箇所に絆創膏と包帯で治療された跡があるのを見て、粥はようやく何があったのかを思い出した。

そうだ……僕は、あの三人を……。そして、織は……そうだ、織はどうした……。

愛犬とはぐれたかのような不安と焦りを覚えた粥は、無理矢理起き上がろうとして激痛に顔をゆがめた。ソファから転げ落ちるように膝を付くと、全身の痛みをこらえて立ちあがる。織は……どこにいった……。

そのとき、少し離れた台所から母親の声が聞こえてきたのに気付いた。

「そうなの。織ちゃんも大変だったのね」

「なんのなんの……粥に助けてもらったのは予のほうじゃからの！」



織……。ああ、無事だったか……。

粥は台所の二人に勘付かれないうちに、音を消しながら歩み寄った。

すりガラスの曳き戸のすき間から台所を覗き見ると、織はダイニングテーブルに座っており、なぜか粥の母がブラシで織の髪を梳かし、ひとつに束ねようとしていた。テーブルの上には、紙袋から出されたヘアゴムとシュシュが出番を待つように並べられている。

「うふふふっ、面白い喋り方をするのね。でも織ちゃんとお話していると、元気になるわ」

「ご母堂は……元気が無いのか」

「最近ね、夫を亡くしてから、何をしても気力が湧かなくて。あの子もあのとおり内気だから、話相手になるわけでもないし」

「う、む。確かにちと内向的じゃの」

「織ちゃんみたいな娘がいたら、もう少し私も明るく振る舞えたのかしらね。あの子を励まさなきゃいけないのに……あの子にはかわいそうなことをしたわ……」

と寂しげに微笑んだ。その姿を見続けられず、粥は、うなだれた。

「僕のほうこそ……ごめん……母さん……」

弱さをさらけだした母親を、元気づけるどころかずっと避け続けていた自分を、初めて強く恥じた。

「はい、できた！ あら、かわいい。その服にも似合うのね、ポニテールって」

「おお、ありがたい。なるほど、こうして櫛で髪を整え、ヘアゴムできつく縛るのじゃな」

「シュシュも付けてごらん。趣味のいい色じゃない」

「ふふふ、驚くなかれ。粥が選んだのじゃぞ」

「えっ！？ そんなセンス、あの子にあったの！？ あら……本当

に似合うわ」

すみません、みきなセンスです。弼は痛む肘を押さえ、蔭ながら謝った。

母親は織の正面の椅子に座ると、鏡を立てて見せた。織は、嬉しそうに頭を左右に振りながらポニーテール姿を確認する。つんと指先でシュシュに触れるあたり、どうやら当人も気に入った様子だ。しかし、鏡を持つ母親の顔に明るさが足りないことを見てとった織は、しばらく考え込むと、真剣な顔つきで切り出した。

「ご母堂、提案があるのじゃが」

「提案？」

「そうじゃ。大変不躰なこととは存じておるのだが……」

一度言い淀んだ織は、顔を上げて真剣な表情を見せた。

「予にこの家の一部屋を間借りさせてくれぬか」

「……えつ、つまり……下宿!？」

ええっ!?! 弼は織のあまりに思いきった提案に、音を立てないよう、器用にのけぞった。

「そうじゃ! 予は先ほども申したが親がこの国におらぬ。そしてできれば弼と同じ学校に通いたいと思うておる。必ずどこかに住まなければならぬのじゃが、こんなこともあつたばかりじゃからの……正直一人は不安なのじゃ」

親? 学校? 通う? 何を言い出すんだあいつは! だいたい授業について行くだけの学力と金はあるのか。特に、あいつにとつて一番の鬼門は現代常識だ。信号の意味もわからず現代人として生きるには不都合が多すぎる。そもそも彼女は人間ですらないではないか。

「親が不在では生活にも支障をきたす。もちろん家賃と食費はお支払いいたすゆえ、ご面倒ではあるうが予の食事も賄っていただけ

とありがたい」

極めて明るい声で織が言う。その顔に、母親の驚いた顔が少しだけ緩む。しかし

「そりゃ、家計も助かるし、私も織ちゃんがこの家にいてくれたら嬉しいけど……」

と言つて母親は眉を八の字にして口ごもった。

「何か心配ごとでもおありか？ それともやはり、ご迷惑か」

「迷惑だなんて……。ただ、曲がりなりにも男の子のいる家だしねえ……」

自分の息子を指して曲がりなりとはなんだ、と粥は心で反発する。  
「粥のことを申しておるのか」

「あの子のことだから織ちゃんに何かする度胸があるとは思えないけど……あなた、かわいいし。やっぱり心配だわ」

「かわいいなどと、本当のことを堂々と言つものではない」

なんだ、あいつ。照れてやがる。

ずうずうしくも「かわいい」を否定せず、顔を赤らめて恥ずかしがる織に、口が自然とほころんだ。その思いは、母親も一緒だったらしい。目が笑っている。

織は突然、さっぱりとした笑顔になると、母親に向かってこう言つた。

「予は平気じゃ。粥は良い男の子じゃしの<sup>おのこ</sup>」

粥の時間が止まった。

「己の弱さを知っておる。そして弱さを恥じてもおる。何もしないのではない。何をすれば克服できるのか、わからないだけじゃ」

「織……ちゃん」

「ご母堂。粥は、良い男の子じゃぞ」

弼は、口をあけたまま、閉じることができなかった。

あの織が僕を「良い男の子」と言った。織を置いてひとりで逃げようとした僕を……。

「……数年来の親友でも、そこまで言ってくれる子はいないんじゃないかな」

母親の声が震えた。自然、その言葉に弼もうなずく。

ぴちゃん。弼の心の中で水滴の音が同心円に響いた気がした。「織ちゃん、占い師になれるわよ！」

母親が、涙目のまま笑いながらそういうと、織は「占い師とはなんじゃ」と心外そうに反論している。そんな声が遠くなるほど弼は、織が自分を認めた、という事実が信じられず、いつまでも止むことのない衝撃を受け続けていた。

面と向かって褒められた言葉を信用してはならない。陰で言われることをこそ真理と思え。

そんな言葉を弼は思い出していた。

織、お前の陰の言葉、嬉しかったよ。

弼は、陰で、つぶやいた。

心の穴が、ふさがっていく。

## 第一話 心の穴了

## 第二話（1） 弼と、織と、学校と（前書き）

弼ゆだめの家に下宿することになった、人ではない美少女的ナニ力である織しき。共同生活の手始めは、学校の制服の問題であった。

## 第二話(1) 弼と、織と、学校と

### 第二話(1) 弼と、織と、学校と

「いよいよじゃの……」

「うん……」

顔を突き合わせてうなずき合う弼ゆだめと織しき。

「ここは……予は、これを使うべしと思うのじゃが」

「斬新だけど、いいんじゃないかな」

「不安にさせるでない！ 軍師役のヌシがそんな弱気でどうする！」

「弱気っていうか……。いや、絶対勝てるし」

弼の部屋で、ほぼ、いつもの光景が繰り広げられていた。狭い部屋に不釣り合いな32インチのテレビの前で、織がコントローラを握り締めながらペタリと腰を付けて座っている。いつもと少しだけ違うとすれば、弼がその隣に座って一緒にゲーム画面を睨みつけていることだ。

3Dで構成される世界の中で主人公をまっすぐ歩かせることすら苦心していた織は、ようやく最初の中ボス戦にさしかかり、緊張のあまり弼を軍師に据えた。しかし軍師が見る限り、一〇〇人の盗賊砦を一〇万の大軍で攻めるに等しい闘いのため、いまいち緊迫感に欠ける。織の育てたキャラクターは、スライムだけを倒し続けてすでにレベル20を超えているのだ。

「たぶん、ここはレベル5くらいでクリアするべきボスだぞ」

「うるさい！ 予は負けが嫌いなのだ。で、この呪文で良いか？」

「……いいんじゃない。多分効かないと思うけど」

織が選んだのは、どんなに相手の体力値が高かろうと、一撃でモンスターを即死に導く死の呪文だ。ゲームで遊ぶことに慣れているユーザーなら、ボス戦でこの手の呪文は決して効かないことを知っ

ており、まず選択肢から外す。それ以前に、ゲーム序盤のボスを相手に、この呪文を使えるほどレベルアップさせるユーザーがいることなど、開発者ですら予測していないのではないかと弼は思うのだ。

「では、ゆくぞ」

「うん……」

しき は ザリコ を 唱えた！

山賊のボス は 静かに 息を ひきとった！

「やったぞ弼！」

「……えええええっ！？ 効くのっ！？」

一〇〇人からなる山賊のボスは、織の一撃必殺の呪文で、コロリと倒されてしまった。

「なんでも、やってみるもんだなあ……」

「弼、ヌシは使えぬの……。軍師は解雇じゃ」

織は心からがっかりした口調でそう言い捨てると、テレビにピンジャックを刺し込み、自ら密閉型のヘッドフォンを頭に渡した。完全にまた一人遊びモードだ。

別にいいけど……なんかムカつく。

弼は不満そうな顔をして、ベッドに横たわった。

後ろ姿はいつもと変わらぬ妙な和服のポニーテール姿。少しだけ違うのは、弼がプレゼントしたシュシュを結び目に付けていることだ。どうやら織はシュシュのデザインと色が気に入ったらしく、時折外してはニヤニヤと眺め、再び付けなおすということを繰り返している。プレゼントした側からすれば少しは自らの審美眼を誇りたくなるが、残念なことにそのシュシュは彼の幼馴染であるみきなに選んでもらったものだ。そして弼はそのことを織に伝えていない。特に不都合を感じないし、黙っていても問題が起こることは無いと

高をくくっている。

「織ちゃん、届いたわよー！」

階下から弼の母親、律子の声がする。弼は、織のヘッドフォンの片耳を引っ張り、荷物が届いた旨を伝えた。織は目を輝かせてヘッドフォンを外し、

「いざ、参ろうぞぉー！」

階段を一段飛ばしで駆け下りていく。弼は、一緒に部屋を出ようとして膝に軽い痛みを覚え、苦痛に顔をしかめた。ナンコー、鳥居南高校の極悪三人組に自転車で体当たりしてから一週間が経つが、まだ完治には至っていない。膝の肉はえぐれているわ、肘の骨にはヒビが入っているわで、結構な重傷だったのだ。

そうか、もう一週間経つのか。弼は時の経つ早さに思いを寄せた。

大怪我をして帰った日、部屋で横になった弼の包帯を取換えながら、母親の律子は言った。

「織ちゃんが、家に下宿したいそうなんだけど。あなた、どう思う？」

「どう思っつて……」

戸惑ったふりをしたが、弼はその話を隠れて聞いていたため、そこまで驚きはしなかった。

「母さんはどう思っただよ」

「思春期の男の子を抱える母親としては、そりゃ不安よ。織ちゃんだってトイレも行けばお風呂も入るだろうし。洗濯ものだって出るわけでしょ」

おや、と弼は違和感を感じ、その理由に思い当たった。織がトイレと風呂に行った姿を見たことがない。彼女は排泄や入浴をどうしているのだろうか。

「そもそも、織ちゃんが襲われているところにたまたま通りかかっ



たあなたが助けて、そのまま下宿って……。なんかしっくりこないのよね。出来すぎていうか。織ちゃんは本当に良い子だとは思っけど」

なんだ、そんな話になっていたのか。織め、僕が気絶しているのを良いことに、かなり適当な作り話をでっちあげたな。弼は心の中で舌打ちした。

「織と話している母さん、元気そうだよ」

「……そうね。あの子、先天的な明るさを持っているみたいで、話していると気分が軽くなるのは確かよ」

「なら僕は賛成だ」

「えっ」

「織の下宿、賛成するよ」

突然、断定的な口調になった弼に、律子は驚いた。

「ごめんな、母さん。僕、ちゃんと母さんと話ができていなかったよな」

驚く律子から目を逸らし、天井を見つめる弼。

「正直、父さんが死んだってこと、まだ実感がわかないんだ。だから今でもその現実から逃げ回っていて、自分の気持ちをちゃんと整理できていない」

律子は手を止め、おし黙って聞いている。

「だから母さんがどんなに悲しい思いをしているのか、想像もつかないし、元気づける方法もわからない」

そこまで言って、弼は母親を見た。案の定、律子は目につつらと涙をためている。でも、今まで逃げ回っていた分、今日は絶対に逃げないと決めていた。

「もし織がいることで、母さんが少しでも元気づくなら、いてもらえばいいんじゃないかな」

「……やっつと、お父さんのことを、ちゃんと話してくれたわね」

律子が笑顔になると同時に、涙が頬を伝った。

「急におしゃべりになるんだもん。……びっくりするじゃない」

「……急にケンカもするようになったしなあ」

「ばか息子」

笑いながら母親は目元をぬぐった。

それからというもの、織は毎朝、弼の家に遊びに来る“ふり”をし、半分は母親とおしゃべりを楽しみ、半分はゲームで時間を費やしながら、ずうずうしくも夕飯を共にした後自宅に帰った“ふり”をしていた。夜はどうするのだろうと心配する弼をよそに、彼女は恐ろしいことに二階の窓から弼の部屋に入り込み、夜中はずっとゲームで遊んでいたのだ。

そもそも自宅などというものが彼女にあらうはずもない。

「だって、人間じゃないし」

弼はすでにそう判断している。ただ、人間ではないからといって忌み嫌ったり蔑んだりするつもりは毛頭ない。犬だって猫だって人間の友となれるわけで、ならば異世界の者と友好関係を結んだところで何もおかしいことはないはずだ。頭に来れば怒ればよいし、寂しそうであれば慰めればよい。

「あれ、どうしてこんなことを思えるようになったんだろう」

時折、考え方が急激に変化したことに、自分でも不思議な思いがする。

織がこれまで弼にしてきたことは、一つの言葉ですべて片が付くつまり「強烈な自己主張」だ。あの口調で何がしたい、これがしたい、と自分のやりたいことを、臆することなく、堂々と、そして悪びれずに、主張してくる。

弼の我慢が限界に達した日、彼は織の要求に対して断固とした態度でノーと言った。織は、自分の主張が通らないことにいらだちを覚えながらも、最終的には折れた。その日から、織の自己主張とケンカをすることで、お互いに住みよい空間をつくることに慣れてきた気がする。

「ケンカするのが一番、ってことかね」

正確に表現するなら、手をつなぎながらケンカする、ということだろう。弼はそこまで理解をしたわけではない。しかしニュアンスは掴めるようになってきたのだ。引きこもりだった半月前に比べれば、ずいぶんな進歩ではないだろうか。

実は、今日から織は正式に明里家<sup>あかり</sup>に下宿する。織の部屋は、弼の父親が使っていた四畳半の書斎を整理して使うことに決まった。

「着替えをしまえて、寝られればよい」

とは織の要求である。着替え？ 一日中あの和服でいるんじゃないのか、と弼は疑問に思ったが、数日前に律子と織の間で交わされていた会話を思い出して納得した。

「織ちゃん、制服はどうするの？」

「制服？」

「学校に着ていく制服、はやく買っておかないと」

「……」

織は弼に目で「そうなのか」と聞いている。小さくうなずく弼。

律子は新たに娘が出来たようで楽しくなってきたらしく、怪我で動けない弼をほったらかして織と二人で制服を作りに出かけてしまった。そして夕方過ぎ、弼が壁に手をつきながら必死の思いでトイレを済ませた直後、二人は笑いながら大きな買い物袋を抱えて帰ってきた。袋の中から織の普段着が山ほど出てきたのを見たとき、弼はまず母に呆れ、次に織に感謝した。

「僕では、母さんを笑顔にできない」

罪に似た引け目を、弼はまだ感じているのだ。

律子が「届いた」といったのは、サイズを合わせた織の制服だ。

弼にとっては見慣れた服装なので、特にさしたる感慨もないのだが、実はこの学校の制服はプレミアが付くほど女の子には人気の代物だ。学力が県内でも上位にいないと入れない高校のため、制服のためにわざわざ県立のトップ校を蹴って入学してくる女子もちらほ

から見受けられるそうだと。そして、卒業シーズンになると高値で売買される、という悪習が生まれ、問題視もされている。

夏服は丈の短い白いブラウスの左胸に校章があらわれ、首元にはグレーの短いタイが。そしてスカートは赤と黒とベージュのタータンチェックという、少女性をむやみやたらと強調したデザインになっている。ステッチもカッティングもデザイナーが細心の意匠を凝らしており、くびれは細く高く、足は長く艶めかしく見える。

地味な紺のブレザーからこの制服に変わったのは、前理事長が就任した八年前からである。彼は相当すけべな人だったらしく、理事長に就任した直後、女子の制服におかしな規定を設けた。

- ・ブラウスはスカートの中に入れて「はいけない」
- ・スカートは膝「上」5センチ以上
- ・靴下は「自由」。ニーソックスやストッキング「も可」
- ・タイは首元にきつく締め「ず」に第一ボタンを留め「ない」ことを推奨
- ・ピアス、アクセサリ類は禁止「せず」

心ある人は「制服パブか！」とツツコミを入れるそうだが、そんなことを知らずに入学した粥は、背伸びをすればおへそが丸見え、足をだらしなく開けばパンツが丸見えという女子の制服に、毎日目のやり場に困っている。

前理事長曰く

「学力で県内トップなら、服装くらい自由にさせてやれ」

「女の子は可愛くなければいかん。可愛ければ男は自然、彼女たちを守りたくなるものだ」

「制服が可愛くて誰に迷惑がかかる。下らぬ反抗心に時間を費やさせるより、学力に集中させたほうがよっぽど生徒のためである」

と屁理屈をいってPTAと教育委員会をねじ伏せたそうだと。実際、彼が理事長になってからというもの、県内のトップクラスの女子が

集まるようになり、かつその噂を聞きつけた男子がスケベ心で勉強を頑張る、という相乗効果が生まれ、私立<sup>しりつおうびがくえん</sup>？美学園は、全国でもトップの成績を収めるようになった。残念なことに前理事長が普段からあまりにもスケベすぎて、彼の手腕は全く評価されていないのだが……。

階下から織と律子のきやつきやつとはしゃぐ声がする。弼はひとまず居間に降りることにした。膝がまだ痛み、壁に寄りかかりながらでないと歩くことすらままならないのだが、ほとんど動けなかった数日前に比べれば確実に快方に向かっている。小さな踊り場から下を見下ろしたとき、居間に織の制服姿が見えた。

おお……。

目鼻立ちもはつきりしていて華奢な体つきの織は、きっと？美学園の制服が映えるだろうと想像していた。なので心に準備があった分、陶然とするまでには至らなかったが、「かわいい」と見蕩れるには十分な立ち姿だった。

「弼、どうじゃこの姿」

織は褒めてほしいというよりは、とにかく自慢がしたいだけらしく、得意げに見せつける。弼は素直に褒めるには心情が複雑で、先ほど「ヌシは使えぬ」と言われたこともあり、何か別の言い方でやり返したいと思っていた。

「……へえ。意外と……」

「ふふーん、かわいいじゃろう」

「……胸、あるんだな」

「胸……？ハッ、乳のことか！ヌ、ヌヌ、ヌヌヌシ！無礼にもほどがあるぞー！」

「そつよ弼！女の子に向かって何てこと言うの！気にする子は気にするんだから、少しデリカシーを持ちなさい！」

織を赤面させることと慌てさせることまでは計算通りだったが、律子を怒らせることまでは想像できなかった。計に勝って勝負に負けた感じた。

実際、織は今までおかしな和服を着ていたせいもあってか、体型がいまいちわからなかった。しかし体の線が出やすい夏服は、彼女のふくよかな胸を強調し、新鮮な驚きを感じていた粥だった。あまりじっくり見るのもイヤらしいので、目線を外そうとした瞬間、粥は、おや、と織を再び見つめた。

顔はもとより首から鎖骨まで赤くした織だったが、自らの姿を鏡に映しながら、律子に向かって少し不安げに言った。

「しかしご母堂。この服は股の風通しが良すぎる。それにずいぶんと薄着じゃの。現世のおなごたちはこのように無防備な姿で平気なのか……」

「ふふふ、いまどきの女子高生なら、スカート丈はこれくらいで当然なのよ」

そう言いながら、律子は織のスカートの裾を引っ張り、腰の高さを調整している。

「うーん、確かに慣れないと短いからちょっと寒いかもしれない……わね……し、織ちゃん!？」

急に顔を赤らめて、慌て出した律子。その慌てぶりを見て、もしや、やはり……と同じように顔を赤くし出す粥。無駄に心拍が上がる。全身が熱くなる。

一方の織は全く気にとめた様子もなく

「なんじゃ」

と能天気聞く。

「あ、あ……あなた、下着は!？」

「下着とはなんじゃ」

「!! やはり……」。

「ひっ! ……ゆっ! 粥ッ!! あんたは部屋に戻ってなさいッ

!!」

律子の怒声に蹴飛ばされたように、弼は自室への階段を必死で昇る。

そして弼は、ベッドにもぐりこんで布団を頭からかぶった。  
……さっき、ブラウスの上から透けて見えた、の……は……。

「ッ！」

布団の中で悶絶する弼。

そういえば、律子は、スカートを触りながら「下着は」と聞いていた。

「ま、まさか……。      アアアッ！」

弼は今夜、眠れそうもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2492w/>

---

ユダメシキ！

2011年10月7日03時23分発行